

# 図書館学思想の発生基盤

—Gabriel Naudé の思想を中心として—

小 倉 親 雄

## 1

のちには(1889)ストゥットガルト(Stuttgart)の宮廷図書館長となったツォラーは(Edmund Zoller, 1822—1902)は、“図書館学”(Bibliothekswissenschaft)について、科学(Wissenschaft)としてのそれは、‘われわれの世紀’すなわち19世紀の創造になるものであり、したがって‘若い学問’であると記している。今から120年以上も前の1848年の言葉であるが、時はまさに19世紀の前半を終らんとしており、ドイツにあっては、1807年シュレチンガー(Martin Wilibald Schrettinger, 1772—1851)が、初めて“図書館学”(Bibliothekswissenschaft)の語を採択してからおよそ40年、一応この語が確立された概念としての定着期を迎えた時期に該当する。

この彼のことは、1848年2月から51年3月に及んで、8回にわたり“セラピューム”(Serapeum)誌上に分載した論文“図書館学”(Die Bibliothekswissenschaft)の中で述べられているものであるが、そこでは図書館学の語に対する創始者としてのシュレチンガーを自らの思想的起点としている彼の立場が、きわめて鮮明にうかがわれるものである。しかも偶然とはいえ、彼がその連載を完了した月の翌4月12日をもって、シュレチンガー自身は79年に及んだその生涯を閉じており、したがって奇しくもこの論稿は、図書館学の名を冠して生存中に発表され、“創始者”の思想を展開したいわば最後の文献といえるものになった。

他面また、この19世紀の半ばを大きな分岐点として、やがてその後半期に入っていくとともに、自然科学的方法論ならびに体系論の過大評価・科学概念の狭縮化という一般的傾向も影響して、シュレチンガー以後、積極的に図書館学の語を使用して来た従来の情勢は、逆に停滞後退の方向へと、転換の過程をたどって行った新たな事態をその前提とすれば、<sup>2)</sup>ツォラーのこの論文は、図書館学の語のもとでまとめられた19世紀中の、いわば最終的な、しかもきわめて重要な文

1) Zoller, Edmund: Die Bibliothekswissenschaft. *Serapeum; Zeitschrift für Bibliothekswissenschaft, Handschriftenkunde und ältere Literatur*. In Verein mit Bibliothekaren und Litteraturfreunden, hrsg. von Dr. Robert Naumann. Jg. 9 (1848), S. 33, 129 (Kraus Reprint, Nendeln/Liechtenstein, 1968) なお、この論文は下記のように分載されている。

I. Jg. 9 (1848), S. 33-36.

II. S. 123-133.

III. S. 133-137, 157-160, 268-284.

IV. Jg. 11 (1850), S. 126-128, 137-143; Jg. 12 (1851), S. 92-95.

2) 拙稿：ドイツにおける図書館学思想の形成とその起原 図書館界第23巻第3号 昭和46年9月参照

献の1つであり、何よりもまず、その世紀前半に対する総括的な役割を果たしている点で、同時に歴史的にも貴重なものといえるであろう。

彼によると、19世紀の前半中に在っても、1840年代に入ると、総体的にいて、“図書館学的課題”をその対象とした研究文献はとみに減少し、その期間中では、いわば最も無関心な時期が訪れて来たという。<sup>3)</sup>彼はそれを物語る事実として、1841年から48年に至る間に著わされたものとしては、わずかに3種を数えるのみであること、しかもその中の2つはイタリーのものであったことを付け加えている。そして残りの1つはドイツのものであり、しかもそれはツォラー自身が1846年に公刊した“図書館学概要”(Die Bibliothekswissenschaft im Umrisse, Stuttgart)に外ならず、したがって上記の論文は、この“概要”の後を追って、引きつづきその見解をさらに詳細に展開・敷衍した形をとり、全文およそ1万3,000語、30ページ以上におよぶ長文のものである。このようにして19世紀前半最後の10年間、しかもその後半のドイツは、彼のこの2つの著作によって代表されているといっても決して過言ではない。同時にまた19世紀の前半がたどって来た図書館学的思想の実質的な総括でもあるこの論文は、さらにさかのぼり、こうした思想の前史をたずねて、その“学問の開祖”(Gründer der Wissenschaft)を17世紀に求め、なお図書館学の前身形態ともいうべき“ライブラリー・エコノミー”(Bibliothekonomie)について、その最初の基礎づけ(Begründung)が行なわれた時代を14世紀の前半と見なす立場を展開している。<sup>4)</sup>もちろんこうした考え方は、現代に在っては、特に目新しいものではないが、19世紀の半頃においてすでにこのような思想的系譜が明確にたどられていることの意義はきわめて大きく、おそらくは後の研究者に対して大きな示唆を与えるものとなったであろう。要はツォラーにおいても、19世紀初頭以来の、ドイツを中心とする図書館学思想の総括と展開に際して、そうした思想の発生に導いて来た先行思想が同時に重大な関心となっていたことを意味するが、その発生基盤を明らかにして行くことは、図書館学史上におけるきわめて重要な課題であるといわねばならないであろう。

なおツォラー自身についていえば、彼は1822年5月20日スュットガルト(Stuttgart)に生まれ、チュービンゲン(Tübingen)において哲学・言語学を修め、1846年以降は、郷里にあって新聞記者としての多忙な生活を続け、1885年(65歳)社長となった人であり、80年にわたった彼の生涯の中、そのほとんどは操縦界によって占められている。そして彼がその地の王立・宮廷図書館長(Direktor der Kgl. Hofbibliothek)となったのはその晩年、すなわちすでに67歳に達していた1889年のことであった。すなわち彼が上述の“概要”を公にした1846年といえば、ようやく学業を一まず終了して、社会人としての第一歩を踏み出した年の、正確には23歳、論文の方も25歳から28歳に至る間のいわば壮年時代のものであった。しぜん図書館人としての経

3) Zoller, E.: *op. cit.* *Serapeum* 9 (1848), S. 33.

4) *Ibid.*, S. 134.

5) *Ibid.* *Serapeum* 11 (1850), S. 126-127.

験も、また図書館との直接の関係も持たない一個の門外漢 (Laie) としてそれらの著作はなされてお<sup>6)</sup>り、そのためにかえて、司書職に寄せている彼の情熱的な態度が、当時の現職図書館人を激励するところ多いものとなった点<sup>6)</sup>が特筆されている。

1846年刊行の“概要”は、わずか72ページ、しかも小形 (8°) のものにすぎないが、いわば彼にとっては現実に思想的先達の立場にある既述のシュレチンガー、それにデンマーク人モールベッヒ (Christian Molbech, 1783—1857)、仏人コンスタンタン (Leopold Auguste Constantin, pseud., 1779—1844)、さらにペッツホルト (Julius Petzholdt, 1812—1891) などによって試みられて来た図書館学の内容構成の跡をたどったあと、自らの所見を展開したものである。グレーゼル (Arnim Graesel, 1849—1917) ものべているように<sup>7)</sup>、彼の立場は、図書館学を、“整備の学” (Lehre von der Einrichtung)・“管理の学” (Lehre von der Verwaltung) という2つの側面から捉えようとするものであり、その点シュレチンガーに発し、モールベッヒによって内容整序を一応終ったもの、もっと詳しくいえば、シュレチンガーの思想を展開したエーベルト (Friedrich Adolf Ebert, 1791—1834) の所論に立脚して、その体系化を図ったという意味で、“エーベルト＝モールベッヒ組織法” (Ebert = Molbechsche Systematik) と呼ばれているものの枠外に出るものではないが、細部の点においては、自分自身の考え方を付加したものである。すなわちツォラーは、モールベッヒより39歳も年少ではあったが、思想史的にはそのつぎの段階に位置する人物であり、その立場において彼は、図書館学の上には、なお多くの観点が見落されたままであること、特に“管理の面”で、それ以前に明らかにされて来たところはきわめて少ないことを指摘しながら、結局図書館学は、図書館における“整備”と“管理”の双方に対して、それへの“方向指導” (Anleitung) を保って行くことによって、はじめて科学としての名辭を掲げること<sup>8)</sup>ができるとのべている。

## 2

19世紀における図書館学思想は、ドイツをその中心として、一応その前半期をもって形成の第一段階を終了した形をとり、しぜんシュレチンガーを起点とし、このツォラーを1つの到達点とする線上に、それぞれ思想形成に参画した人々が連なった姿をとどめている。そうした意味においてシュレチンガーの“図書館学全教程試論” (*Versuch eines vollständigen Lehrbuchs der Bibliothek-Wissenschaft, München, 1808*) は、それへの歴史的出発点を表示する道標として、

6) Naumann, Robert: *Die Bibliothekswissenschaft im Umrisse. Von Edmund Zoller. Stuttgart (bei Julius Weise) 1846. (Mit einem lithographirten Plane). 72 Seiten. 8. Serapeum 7(1846), S.369—370 (31. Dez.), Anzeigen.*

7) Graesel, Arnim: *Handbuch der Bibliothekslehre. 2te, voellig umgearb. Auflag. der “Grundzuge der Bibliothekslehre. Neugearbeitung von Dr. Jul. Petzholdts Katechismus der Bibliothekslehre”.* Lpz., 1902, S. 8—9.

8) Zoller, E.: *op. cit.* *Serapeum* 9 (1848), S. 129.

その存在は近年いよいよ大きく顧みられようとしているが、しかしながらこの“試論”それ自体も、実は突如として現われたものでも、また全く独自の発想に基づくものでもなく、結局は大きな歴史的背景の所産に外ならない。このことに関してネストラー (Friedrich Nestler) は、

シュレチンガーの“試論”は、それ自体実は長い前史 (Vorgeschichte) への連がりをもつものであった。すなわち彼がこの書において取り扱っている諸原則は、おおむね16世紀の半ば以来、書誌的・司書的分野をその専門とする著者たちが対象として来たものであったからである。まず第一に、書誌的著作をもつほとんどの人々は、図書の収集と整理、それに利用上の諸原則に言及して来たし、主導的な著者たちは、そうしたテーマに触れることをその習わしとして来た<sup>9)</sup>

とのべて、16世紀の中葉を一応の起点とするその“前史”の系譜に触れている。彼がここで16世紀の半ばをもっておよその始点として設定しているのは、明らかにスイスの医者であり、また博物学者でもあったゲスナー (Conrad Gesner, 1516— '65) と、その編さんに係る膨大な“総合書誌” (*Bibliotheca universalis*, 1545— '55) を念頭においての結果であるが、しかしながら彼の場合においても、このゲスナー以後、それに類似の企画・関係文献が数多く現われて来た中において、図書の収集、さらには、司書的・実際の取扱い方法に関する諸問題を全体的に結合し、その面での‘最も著名な著作’として、フランスのマザラン文庫 (*Bibliothèque Mazarine*) を築き上げた実質的な当事者であるノーデ (Gabriel Naudé, 1600— '53) の著“図書館建設についての意見書”<sup>10)</sup>を挙げている。すなわち19世紀の前半、ドイツにおいて図書館学思想が形成されて行ったその前史を振り返ってみた場合、この書が存在が大きく浮び上って来たためである。既述のツォラーが“学問の開祖”，あるいは“われわれの学問の開祖” (Gründer unsrer Wissenschaft)<sup>11)</sup>と呼んだのも実はこのノーデであって、このようにしてドイツにおける図書館学思想を、その根原においてつちかった人として、このノーデを回想することは、19世紀以来の、いわば伝統的なものであるが、しかしそれは単にドイツのみに限らず、ヨーロッパの他の国々におい

9) Nestler, Friedrich: Bibliothekslehre im Jahre 1902. *Über Bücher. Bibliotheken und Leser; Gesammelte Beiträge zur 60. Geburtstag von Horst Kunze*. Lpz., VEB Bibliographisches Institut, 1969, S. 114-115. (*Zentralblatt für Bibliothekswesen, Beiheft 86*)

10) Naudé, Gabriel: *Advis pour dresser une bibliothèque*. Présenté à Monseigneur le President de Mesme. Paris, F. Targa, 1627. この書について L. C. カードでは“166 [1] p. 16  $\frac{1}{2}$  cm”, 2版 (Paris, 1644: 著者による訂正が行なわれたと考えられている) に基づいて刊行された 1876 年のもの (Paris, I. Lisseux) については“xv, 111 p., 21, 14  $\frac{1}{2}$  cm”と記載している。

本稿作成に当って使用したのは下記である。

*Advice on establishing a library*, by Gabriel Naudé, with an introduction by Archer Taylor. Berkeley & Los Angeles, Univ. of Calif. Press, 1950.

なお1963年東独ライプツヒの“VEB Edition”により、クンツェ (Horst Kunze, 1909—) の独・仏・英・露語の“あとがき” (Nachwort・Postface・Epilogue・Послесловие; p. 125-148) を付して、本文は1627年の初版のままに、正字法 (orthographic modernization) に直さない形で覆刻 (*Advis pour dresser une bibliothèque par G. Naudé*) され、最近それを入手したが、ページ数は122ページ (本文) に変更され、大きさは19.5cmとなっている。

11) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum* 11 (1850), S. 139.

てもほぼ共通に見られる理解の仕方であるといつてよい。マソン(André Masson, 1900— )が、ノーデのこの“意見書”が公刊された1627年について、それは単にフランスのみのものではなく、ヨーロッパのための年である<sup>12)</sup>と記しているのはそのためであつて、いうまでもなくこの事が後のヨーロッパにおける図書館・図書館学思想に非常に大きな影響を与えるものとなったためである。しぜんこの著述ならびにノーデ自体に対する回想は現代においてもいろいろな形のもとで、また種々の表現をとって行なわれている。すなわちその著作を、‘図書館学 (Library science) に関する最も初期の文献の1つ’<sup>13)</sup>として、特に図書館学の語を用い、その最も古いものとして位置づけているものから、つぎには、“ライブラリー・エコノミー” (Library economy) の立場から、‘近代的なビブリオテコノミーの土台’を設けたのがこの書物であると見なすもの、<sup>14)</sup>あるいは、‘ライブラリー・エコノミーについて、その体系的な教本をつくろうとしたこれが最初の試み’<sup>15)</sup>としているもの、その外では、‘図書館の管理・運営を取り扱った開拓的著作’・‘図書館という組織体の全体図を描き上げようとした一番初めの真剣な試み’<sup>16)</sup>、‘図書の収集・保存・目録作製について書かれた最初の近代的な論考’、さらには、‘ライブラリアンシップの体系を志向したまことに誠実な試み’<sup>17)</sup>などの評言がそれである。そしてノーデ自体については、ロンドン大学のアーウィン教授 (Raymond Irwin, 1902— ) によつて、‘ライブラリー・エコノミーに関する理論を提示した最初の人物’<sup>18)</sup>として、その図書館思想史上における位置づけが行なわれている。そして彼はさらに、17世紀に入って間もない時期に、このようにノーデによつて初めて図書館がその全体として対象化され、そこに内包されている諸問題の摘出が行なわれ、さらにそれらを1つの体系に結びつけて行こうとする努力がなされ、そうした意味でのまさしく開拓的な著作をもつに至ったことを、“画期的に重要な出来事” (important landmark) としているが、さらにノーデをして、このような志向に駆り立て行つたものについて、それは、図書館というものを1つの“合理的な組織体” (rational system) として方向づけようとする点にあったことを指摘している。<sup>19)</sup>その意味は、図書館の体制を、無駄の排除、合目的な改善整備のもとに置こうとした事をも、もちろん含むものであろうが、しかしながらここで彼が、その由来するところを、遠くさかのぼつて、紙のヨーロッパへの導入とその普及、そして15世紀における活字印刷の開始に求め、ついでその必然的結果としての図書の量産化、徐々ではあるが図書館規模の拡大方向に結び

12) Masson, André et Salvan, Paule: Les Bibliothèques. 2 ed., 1963. p. 33 ( *Que sais-je?* 944).

13) Johnson, Elmer D.: Communication. 3rd ed., 1966, p.87.

14) Masson, A. et Salvan, P.: *Ibid.*, p. 26.

15) Wormald, Francis & Wright, C. E.: The English library before 1700. Lond., Univ. of Lond., 1953, p. 11.

16) Irwin, Raymond: The English library; sources and history. Lond., George Allen & Unwin, 1966. p. 160. (Chap. x: Gabriel Naudé and the problems of mass production)

17) Steinberg, S. H.: Five hundred years of printing. Lond., Faber & Faber, 1959, p.181.

18) Irwin, R.: The heritage of English library. Lond., George Allen & Unwin, 1946, p. 41.

19) Irwin, R.: The English library..., p. 167.

つけて考察しているのは、ノーデの置かれていた時代の歴史的背景のもとで、この著述の成立を意味づけようとしたものである。そしてこのことは彼がさらに、イギリスではなお当時誰一人としてそのような考え方には到達していなかった時、フランスにおいては何故それがなされたかに言及している言葉との関連において、よりよく理解することができる。

既述のようにこのアーウィンはノーデをもって、“ライブラリー・エコノミー”についての理論 (theory) を初めて提示した人として位置づけてはいるが、この場合彼がこの術語の定義的なものに全く触れていないのは、それをいわば自明のものとしているためであろう。そしてどのような表現のもとで現在その定義づけが試みられていようと、彼の場合、イギリスにおいて伝統的に理解されて来ているものに則しこの語の使用がなされているとみて差支えないであろう。ブラウン (James Duff Brown, 1862—1914) によると、それはもともと目的 (purposive) な用語であるという。<sup>20)</sup> すなわちすべて物事を時間・労力・経費の面で無駄を除去し、最善の方法をもって処理することを目的とする場合に“エコノミー”の語が用いられ、したがって“ライブラリー・エコノミー”は図書館業務をそのように処理して行くことを可能にする技術および専門的な知識という意味で彼自身はそれを使用している旨記している。そして彼の著であり、その没後はセイヤーズ (William Charles Berwick Sayers, 1881—1960) によって、さらにその死後はロック (Reginald Northwood Lock) によって改訂・増補・改筆が重ねられ、1961年をもって第7版に達し、この面における権威と声誉を担って来た‘ライブラリー・エコノミー便覧’ (*Manual of library economy*) は、1903年の開版であるが、彼がその初版の序文 (preface) で<sup>21)</sup> のべているように、図書館業務の面で、継続的かつ広範に試行されて来、しかも検証に堪え、その生命を保って来た主要な方法について、その総説を試みんとしたのがこの書物であった。しかし同時に彼はまた、他の学問の場合とは異なり、図書館の分野においては、広く認められた一連の確定事実をもって、本格的に展開された“ライブラリー・エコノミーの学問” (science of library economy) を打ち建てて行く基盤形成の域にはいまだに到達していない旨を付け加えている。要はその方向を目指しての彼自身の志向に触れたものであろうが、このようにして彼におけるライブラリー・エコノミーは、最善の方法をもって図書館業務を処理して行く上に必要な知識と技術、しかもそれは試行錯誤の過程を経て到達し得たものであるとともに、それらを正しく展開して行くことによって、1個の学問を志向し得ると考えられたものであった。

アーウィンのいうライブラリー・エコノミーが、ブラウンのそれと概念的に全く同一のものであるとは言えないまでも、少なくともイギリスの伝統的用法のもとで、自明のものとして使用されているとすれば、その枠外に出るものではなく、したがってノーデをもってそれについての理論

20) Brown, James Duff: *Manual of library economy*. 6th ed., by W. C. Sayers. Lond., Grafton, 1950, p. 1.

21) Thornton, John L.: James Duff Brown (1862—1914.) *Selected readings in the history of librarianship*, 1960, chap. 39 (p. 291—298)

を初めて提示した人とする彼の位置づけも、ノーデが図書館を運営して行く上の主要事項を採り上げて、その在るべき姿を全体的に取りまとめ、そそれを理論的に展開した最初の人と見なしているためである。

3

しかしながら、ノーデの“意見書”成立の背景に、図書館をもって1つの合理的な組織体として方向づけようとする心意があったことを指摘し、それを図書の量産化、当然訪れるべき図書館規模の拡大化と結びつけて考えているのは、アーウィンの場合、ライブラリー・エコノミーの発生それ自体がこの量産化・蔵書数の増大と不可分に思考されているためである。このことについて彼は、

蔵書が500冊を数える程度なら、自分の図書館の内容および整理面の重要事項は、万事記憶に留めておくことも可能である。しかし5,000冊ともなればそれが困難になり、さらに5万冊ということになると、全く不可能となってしまうであろう。そこで整理上の諸原則ならびに運営上の手順を示すものが作成されて行かねばならないことになる。その結果として現われて来るのが、のちに“ライブラリー・エコノミー”の語をもって呼ばれるようになって来たものの誕生である

と記している。<sup>22)</sup>すなわち蔵書数の増大に伴う記憶能力の限界と、ライブラリー・エコノミーの起原との関連に触れ、ノーデの時代におけるフランスは、この2つのものが結びつくべき段階に到達していた一例として、歴史家として著名であり、同時に政治家、法学者さらにはアンリー三世(1551—89在位)の王室文庫長でもあったトゥー(Jacques Auguste Thou, 1553—1617)の個人文庫が、16世紀中においてすでに刊本8,000冊、書写本1,000冊に達していた事実を挙げている。<sup>23)</sup>なお彼は、イギリスの場合、このノーデのごとき考え方に到達し得た人が全く現われて来なかった事実をこうした立場から考察して、16世紀のイギリスには、図書館の発展を拒む困難な問題が数多く介在していたこと、ためにフランスの場合に比較するとその立ち遅れは非常に大きく、したがって蔵書の多量化という問題に直面するようになったのはようやく“復古時代”(1660—88)に入ってから以降のことであったとのべている。<sup>24)</sup>すなわち上述のトゥー文庫に比肩し得るものの出現は共和制時代(1649—1660)であって、オックスフォード大学のボドリー図書館(Bodleian Library)に遺贈されることになった法律家セルダン(John Selden, 1584—1654)の文庫がそれであり、彼の没後5年目の1659年における蔵書数がすなわち8,000冊であったからである。<sup>25)</sup>なおノーデが“意見書”を公刊した1627年当時にあつては、蔵書1,000冊以上をもつ図書館は

22) Irwin, R.: The English library..., p. 162.

23) *Ibid.*, p.161, 199.

24) *Ibid.*, p.160.

25) *Ibid.*, p.157.

ほとんどイギリスには存在しなかったことを指摘している。<sup>26)</sup>

もちろんライブラリー・エコノミーの発生は、蔵書量の増大ときわめて密接な関係をもつものであるが、しかしその増大そのものが直ちにライブラリー・エコノミーの誕生を意味しないことは、すでに古代数十万点の文献を所蔵していた図書館が存在していたことによっても明らかであり、すなわちそれが総てではなく、またアーウィンが指摘している上述の“合理的な組織体”への志向は、ノーデ自身が自らの置かれている時代に深い省察を加え、将来を展望し、その上で図書館の在るべき姿、その存在意義を思索したところに求めらるべきであろう。このことは彼の意見書が、‘何故図書館はつくられるのか?’という設問の形をもって初っていることによっても明らかである。すなわちノーデの心底に存在していたものは、図書館という組織体の、合理的な社会的位置づけであって、後に触れるごとく、それはその時代に超越して、彼の場合はむしろ未来・子孫への連がりを多くもつものであった。またその収集さるべき資料も、新旧を問わず、思想・宗教などの相違による規制からも解放され、正統・異端、科学的・非科学的を問題としない、そうした意味においては真に“普遍的”(universal)なものであるべきだとする立場であった。

ヘッセル (Alfred Hessel, 1877—<sup>27)</sup>) のいうように、ノーデのごとき思想の持ち主が現われ出たこと、ならびに彼の成し遂げた事績を正しく理解するためには、例えば“歴史的批評の父”と呼ばれているイタリー (フランス在住) のスカリゲル (Joseph Justus Scaliger, 1540—1609)、既述の歴史家トゥー、国際法の祖と仰がれるオランダのグロティウス (Hugo Grotius, 1583—1645)、イギリスの哲学者ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) およびホッブス (Thomas Hobbes, 1588—1679)、イタリーの物理・天文学者ガリレオ (Galileo Galilei, 1564—1642)、“ケプラーの法則”で著名なドイツの天文学者ケプラー (Johann Kepler, 1571—1630)、そして近代哲学の祖デカルト (René Descartes, 1596—1650)、こういった人々によって引き起されて来た‘新たな学問の興隆’とノーデの生涯との2つが、ほぼその時期をひとしくしている事実を心にとめておかねばならないであろう。すなわち、ほとんどヨーロッパの主要国にまたがり、彼にやや先んじて生をうけ、そして彼とともに17世紀に生きて、その時代を切り開いて行ったこれら偉大な思想家たちの影響なしには、彼の思想も、またその事績も到底あり得なかったであろうとされているためである。

しかしながら、このような学者・思想家の影響もさることながら、同時にまた、彼が図書館の問題について深い考察を加え、また果敢にその事績を築き上げて行った背景には、図書館が新たな角度をもって捉えられねばならない時代に到達していた、そのような歴史的現実を明らかにすることもまた必要とされるであろう。すなわち彼の時代は、宗教改革にきびすを接していたというよりは、その余じんがなおくすぶり続けていた時であったからである。

26) *Ibid.*, p.162.

27) Hessel, Alfred: *Geschichte der Bibliotheken; eine Ueberblick von ihren Anfängen bis zur Gegenwart*. Göttingen, H. T. Pollens, 1925, S. 71.

ヘッセルは、‘宗教改革は図書館の歴史の上に1つの時代を画する’<sup>28)</sup>とのべている。すなわち活字印刷がようやく軌道に乗り、15世紀中の約50年間に活字をもって印刷されたいわゆる“インキュナビラ”(*incunabula*)の数だけでも、それ以前の1,000年間につくられた書物の数を優に上回るであろうと推定されている程に、図書の量産化を一応達成し得た直後の1517年をもってこの宗教改革は初っている。そして“ナントの勅命”(1598)によって一時的な落着を見るまでも81年間、その間ある程度まとまった集書や図書館的な施設は、民族大移動につぐ歴史上第2番目の大きな災厄に見舞われることになった。ドイツについていえば、1524年から翌年にかけての、わずか1年間にすぎなかったいわゆる“農民戦争”(Bauernkrieg)だけでも、“最悪の破滅状態”<sup>29)</sup>(schlimmstes Unheil)をもたらしたほどであったが、宗教的な諸施設(Stiften)ならび修道院の解体に際しては、何世紀にもわたって収集されて来た蔵書が、無分別に売り飛ばされてしまったり、あるいはまた“教皇主義文献”(popistische Literatur)としてまっ殺されるなど、特にチューリンゲン(Thüringen, 東独)からマイン川を下り、つぎにはオーデンワルト(Odenwald)およびシュワルツワルト(Schwarzwald)を経てスイスに達する地域の教会図書館が蒙った損害は甚大であり、まことに惨々たる姿を呈したという。なおフランスの“ユグノー戦争”(Huguenottenkriege)も、1562年から96年に至る35年の長期に及んでおり、したがってドイツの農民暴動をしのぐ大きな破壊をもたらしたが、他面また図書に加えられたイギリスでの弾圧は徹底的であった。例えばヘンリー八世(Henry VIII, 1509—47在位)時代の1538年には、ケンブリッジ大学図書館の蔵書に対する検閲が実施されて、“好ましからざる図書”(“offensive” books)に対する弾圧が加えられ、その結果1550年におけるこの図書館の蔵書はわずかに180冊、180年前の冊数を下回るといふ有様となった<sup>30)</sup>。またこの1550年には、狂信的な新教徒であったつぎのエドワード六世(Edward VI, 1547—53在位)が任命した委員(Reformed Commission)によって、オックスフォード大学図書館もまた搜索を受け、その所蔵に係る“教皇的”(“popish”)内容の書写本は、そのほとんどが破棄されてしまい、残りのものも製本師や裁縫師に売却されるという有様であった。要するにイギリスの場合、上述のヘンリー八世の治世をもって開幕し、エリザベス女王(Eli-zabeth, 1558—1603在位)の時をもってその幕を閉じた16世紀は、つねにこのような弾圧のもとにさらされて来、その意味においてもまさに“怒とりの時代”(stormy years)<sup>31)</sup>ともいふべきものであった。

このようにして宗教改革は、中世風の図書館の多くを滅亡に導いてしまったばかりではなく、印刷術の開始による図書の量産化と図書館との結びつきを拒み、結局はそれを一世紀以上にわたって遅らせてしまう結果となった。上述の歴史家トゥーの晩年が、まさに宗教改革のあと100年の時期に該当しているが、そのフランスは逸早く図書館の創建に着手した国であった。

28・29) *Ibid.*, S.63.

30・31) Predeek, Albert: A history of libraries in Great Britain and North America, tr. by Lawrence S. Thompson. Chic., ALA., 1947, p. 6-7.

ノーデが生れた15世紀最後の年といえ、ユーグノー戦争が終結して4年目、ナントの勅命發布から2年の後であり、多年に及んだ宗教戦争が一応の鎮静に向った時期に該当する。しかしながらそこには活字印刷が初めてすでに150年を経過しているにもかかわらず、フランスにおいても蔵書1万冊に達する図書館は未だに現われず、イギリスのごときは、1,000冊に到達しているものほとんどないという有様であった。すなわちフランスでいえば、フランソワ一世 (François I, 1515—1547在位) が1537年仏国内で刊行された図書の1部を必ず納入させることを定めた納本制度 (dépôt légal) を採用して、強力にその増強を図った王室文庫 (*Bibliothèque du Roi*) でさえも、彼の死後75年を経た1622年における蔵書数は、6,000冊にすぎず、しかもその中の半分以上は書写本であり、したがって活字本の方は3,000冊にも達していない実情であった。<sup>32)</sup>すなわち活字印刷の結果が、実質的には、図書館の蔵書に反映している比重はきわめて低く、要するに1世紀半以上に及ぶ長い期間につくられて来た活字本の総数に比較すると、それが図書館に収蔵されている部分は非常に僅少であり、この2つのものの不均衡が余りにも明らかであった。しかも古いもののほとんどが宗教改革に伴う争乱の中でその姿を消してしまい、新しくつくられて来たものも、それを積極的に収集して行く体制が整わない形で17世紀を迎えているのがその歴史的现实であった許りではなく、ノーデが18歳を迎えた1618年、宗教戦争の余じんは再び火を發して、いわゆる“30年戦争”(1618—48)のぼっ発となり、ドイツを中心としながらも、フランスもまた参戦し、わずか53年間にすぎなかった彼の生涯の中、30年間はこの戦争によって占められ、図書および図書館的な施設の被害が、さらに追加されて行く姿を直接体験することになった。そのみならずこの戦争の終結した1648年をもってフランスにはフロンド (fronde) の乱がぼっ発し、実はその鎮定をみた1653年をもってノーデの生涯には終止符が打たれている。しかもこの乱は、宮廷特に政治の実権をもつマザラン (Jules Mazarin, 1602—'61) の政策に反対する貴族・高等法院 (parlement) によって引き起されたものであり、その間、マザラン自身は再度 (1652; '53) にわたり亡命を余儀なくされているが、それは単にマザランの危機であったに止まらず、ノーデにとっては、彼によってその経営を委任され、みずから‘世界における第8番目の不思議’<sup>33)</sup>と呼んでいる程にまで、彼の文庫をフランスにおける最初の大図書館に築き上げた、その“マザラン文庫” (*Bibliothèque Mazarine*) の存亡にかかわるものであった。すなわちここにおいてノ

32) Johnson, E. D.: *op. cit.*, p.86.

33) Naudé G.: To the Parliament of Paris (Avis à Nosseigneurs de Parlement, sur la vente de la Bibliothèque de M. le Cardinal Mazarin), 1652. *News from France, or a description of the Cardinal Mazarin before it was utterly ruined sent in a letter from Monsier G. Naudaeus, keeper of the publick library. Literature of Libraries in the seventeenth and eighteenth centuries*, ed. by John Cotton Dana and Henry W. Kent, Chic., A, C. McClurg & Co., 1970, VI, p. 72. (Reprinted, 6 volumes in I. Netuchen, N. J., Scarecrow Reprint Corp., 1967)

ーデ自身は、政治的・権力的な争いによって、それとは無関係であるべき図書館が、反対派のものによって破壊されようとする現実の前に立たされることになった。結局彼の死期を早めたのも、この危機に直面しての心労によって心身ともにむしばまれた結果であったことが伝えられている。<sup>34)</sup>すなわち、マザランがパリから逃亡（1651年1月）して11か月ののち（同年12月）、高等法院側は彼の首に賞金をかけると共に、同時にまたマザラン文庫に対してはその売却を命じたためであって、これは1月に行なわれた財産没収・文庫差し押えにつぐ第2番目の措置であり、文庫の最終的な運命を左右するものであった。1652年のおそらくは1月ノーデが、高等法院側に提出した“マザラン卿文庫の売却に関し、高等法院の諸公に対する忠言”<sup>35)</sup>は、やや大形（4つ折判）ながら、わずか4ページのものにすぎないが、この文庫をそうした運命に陥し入れようとしていることの暴挙たる所以を訴えてその反省を求め、命令の撤回を迫ったものである。いわば彼がこの文庫の運命にかけた最後の努力であり、読む人の心を強く打たずには措かない、まことに切々たる思いをこめてそれは綴られている。しかし結局は売却の強制執行となり、ついにノーデ自体、運を天に任す外なしと諦めざるを得ない事態へと発展することになった。この最悪の事態の中で彼がなし得た事は、蔵書のうち、自分が専攻して来た医学関係の文献を自身で買いとり（3,500ルーブル）、災害を免がしめることであったが、それとてもその全部を購入する余裕を持ち合わせていた訳ではなかった。結局ほんの1部に限られ、かつまた彼は、みずからが収集して来た蔵書がこのように売却され、散逸の運命をたどる姿を自身目撃するに忍びず、一部医学書の買い取りを終ったあとはフランスを離れ、スウェーデンに赴いたが、これが結局はこの文庫との永遠の別離となった。すなわち時のスウェーデン女王クリスティナ（Christina, 1632—54在位）が、その文庫長ヴォッシュス（Isaac Vossius）の後任として招いたのを幸として、それに応じてであったが、ここに留ることおよそ1年、フロンドの乱も鎮まり、マザランの政権回復に伴って、文庫再建の決意を耳にしたとき、‘もはや何物も彼をストックホルムに引き留めておく事は不可能’であり、喜々として帰仏の途に就いたと伝えられているにもかかわらず、ついにパリにはたどりつくことができないまま、北フランスの、いわゆるアベリアン期文化の石器で著名なアベビユ（Abbeville）において、1653年7月29日をもって病没したからであった。享年53歳、まさに働き盛りであり、その死期を早めた理由の中には、上述の外に、スウェーデンの気候は彼に適せず、ために健康を著しく害した事も挙げられている。したがってあたかも彼が、文庫再建の事業に加ったかのごとく伝えているものがない訳ではないが、しかし事実上そうしたことを全く不可

34) Granniss, Ruth Shepard: Gabriel Naudé 1600-1653: biographical sketch. *Literature of Libraries in the seventeenth and eighteenth centuries*, VI, p.31

35) *Ibid.*, p. 29.

36) 注33を指す。これは1652年仏・英両国語をもってなされたものである。また1654年には下記標題のもとで独訳刊行され、仏文のものも1819年に翻刻（*Literature of Libraries*..., vi, p. 60）

Vermahnung an die Parlements-Herrn in Paris über die Verkaufung der Bibliothek des Herrn Gardinalis Mazarini, 1645.

37) 注34に同じ。

能にする形で彼には死が訪れている。

以上のように、彼の生涯は、その前に100年に近い宗教戦争と、それに伴う集書への弾圧ならびに図書館破壊の歴史があり、その晩年の5ヵ年間はフロンドの乱によって、彼自らがそうした破壊的行為の前に立たされ、身をもってそれを体験することになった。このことは彼の図書館思想をうかがう上には、きわめて重要な意味をもつように思われる。それは彼の名を著名にし、図書館思想史上に確固とした地位を与え、後の人々に対して大きな思想的影響を残したものとして、1627年に彼が公刊した既述の“意見書”に言及して来た従来の一般的態度に特に誤りがある訳ではないが、しかし彼の図書館思想は、この時点において形成し得られたものに留ったままではなかったからである。すなわちこの“意見書”自体は、いわば彼が若き日に描いた図書館像に外ならず、偶然の機縁によるとはいえ、初めて司書業務に携わることになったものとして、司書の任務ひいては図書館の本質を模索して行った結果の所産であった。しかも彼がパリ大学を卒業ののち志した道は医学であり、たまたまその師モロー (René Moreau) の急死によって勉学の道が中断された結果のそれは一時的な勤務にすぎず、したがって1626年、すなわちこの“意見書”を執筆した同じ年、当初の志のままに、医学の勉学を続けるため彼はフランスを離れ、イタリアのパドヴァ (Padova; Padua) に赴いている。

ノーデにおけるフランスでの図書館人としての生涯は、1622年から26年に至る間、このド・メーム議長 (Président Henri de Mesme, —1650) の個人文庫 (*Bibliotheca Memmiana*) の仕事に携わっていた4ヵ年、ついで1642年マザラン枢機卿の文庫長に就任し、フロンドの乱によって1652年スウェーデンに去って行くまでの10ヵ年との、合わせて14ヵ年であるが、この2つの間には16年という長い時間的な断絶がある。そしてそのうちの14年間(1626—28; 1630—42)はイタリアに在住し、もちろんその滞伊中も、バグニ (Bagni), ついでその死後はバルベリニイ (Barberini) と、両枢機卿の文庫に関係はしていたが、かの有名な“クーデターに関する政治的<sup>39)</sup>考察”も実はこの間に執筆され、ローマで刊行されている事実によってその一端がうかがわれるように、文筆に忙しく、事実数多くの著述がここで行なわれている。したがって彼が図書館人として、その偉大な事績を回想されるのは、いうまでもなくマザラン文庫長としてのそれであり、わずか10年と

38) Naudé, G.: *Abvice on establishing a library*, tr. by Archer Taylor. Berkeley & Los Angeles, Univ. of Calif., 1950, ix (*Introduction, by Archer Taylor*)

39) Naudé G.: *Considérations politiques sur les coups d'Etat*, 1639.

この初版はローマで出版され、ノーデの死後、1657・1679年とパリで版を重ねた。いわゆる“聖バルトロメオ祭の虐殺” (1572・8・24) に関するもの。グラニス (Ruth Shepard Grannis) はこれをもってノーデが“虐殺”を正当化 (justification) したものであると見なし、したがって彼を回想するものにとって、この著述がつねに“悲しき汚点”の形をとってつきまとって来るのを如何ともし難いが、しかし‘到低われわれの容赦できない、まことにいまわしい理論’であるといい (注34, p.19-20), エドワーズ (Edward Edwards) もまた、ノーデを回想する場合、彼への尊敬の情を最も小さなものにしてしまうのが、この著述であると記している (*Memoirs of libraries*, Vol. II, p. 771)。いずれにせよ、‘何故にノーデは聖バルトロメオ祭の虐殺に対する称賛者 (eulogist) たり得たかを説明することは困難である’という (*Literature of Libraries in the seventeenth and eighteenth centuries...*, I, 1906, p. 55)

いう短い期間に彼が成し遂げたその奇蹟的な業績であるが、その過程を通じ、さらにはその文庫が最後には政敵フロンドによって壊滅の運命にさらされることになった体験を通じて、彼が到達し得た思想的次元は、若き日の図書館像としてのそれと密接な関係をもちながらも、しかし全く同一であるとは見なし得ないからである。すなわち彼の図書館思想は26歳の時点における壮年時代の発想と、上述のごとき体験がもたらしたものの、この2つの上に構築されたものとして理解すべきであろう。

5

ノーデのざっと100種にも上る全著作中で、‘おそらくは最も愛着の深いものであったに違いない’<sup>40)</sup>と評されている彼の“意見書”についてグレーゼルは、“すばらしい小冊”(vortreffliches Werkchen)・“開拓的図書”(bahnbrochendes Buch)という表現を与え、それが書かれた時期について、‘ノーデはこの書物を、彼がメーム議長の文庫目録作成に従事していた医学徒であった時分の、25から26歳までの間に執筆した’<sup>41)</sup>と記し、グラニス(Ruth Shepard Granniss)は、‘彼がこの書物を、自分の主人に対する感謝の意をこめて執筆したのは、まだ26歳にすぎなかった時、そしてなおメーム議長の司書であった当時のことであった’<sup>42)</sup>とのべている。すなわちその執筆された時期を、すでにメーム議長の許を辞して、医学の勉学を続けるためイタリーに渡ったあとの1627年とする見方<sup>43)</sup>もある中で、やはりメーム文庫に勤務中のもの、そしてその職務を離れる寸前、かつ4か年の在職を謝する意味をこめてメームに捧げたものとの立場をとるものである。

ノーデがこのメーム議長に雇傭されたのは、彼が23歳の1622年のことであったが、両者を結びつける直接の機縁となったのは、1620年ノーデが初めて出版した政治に関するパンフレットであり、それがメームの注目するところとなっていたことと、1622年ノーデにとっては医学の師であった既述のモローの死去によって、勉学の道が断たれていたためであった。要するに全くの偶然にすぎないが、しかし在職4年、ノーデはその司書業務に取り組み、このメーム文庫をして、17世紀の初期における最も著名な図書館の1つたらしめたと記されている<sup>44)</sup>。しかしながら在任の期間も短く、しかも初めての経験であり、かつ依然として彼は医学徒をもって自ら任じており、したがってこの期間は、実際業務の面よりはむしろ、壮年時代の純真な立場において、図書館について思索し、自らの図書館像をまとめ、それが結局は後の図書館活動をつちかって行くための源泉となったことのもつ大きな意義のもとで評価されねばならないであろう。この2つの関連についてヘッセルは、‘ノーデは1642年マザランの許で勤務するようになったあとで、自分が構想し

40) Granniss, R. S.: *op. cit.*, VI, p. 16-17.

41) Graesel, A.: *op. cit.*, S.33 u. Fussnote.

42) 注40に同じ。

43) Thornton, J. L.: Gabriel Naudé (1600-1653). *Selected readings in the history of librarianship*, 1966, chap 8 (p. 57-63)

44) Naudé, G.: *Advice on...*, 1950, vii (*Introduction*)

たところを実現に移す機会を見出した’<sup>45)</sup>と記し、19世紀の偉大な詩人であり、また小説家・批評家でもあったサント・ブーヴ (Charles Augustin de Sainte-Beuve, 1804—1869) は、1840年にマザラン図書館の司書となった人であるが、彼もまた、

多年を経過したあと、マザラン枢機卿のもとで、ノーデが実施に移し、成功を収めたもの、それは彼がメーム議長のもとに在った若き時代に構想したものであり、その偉大な機関・業績・創造への、それは前奏曲 (prélude) であった

とのべている。<sup>46)</sup>ここでいう機関・業績・創造とはいうまでもなく、マザラン文庫と、そこでノーデが成し遂げたものに外ならないが、すなわち“意見書”をその序曲とし、それに導かれて、その間16年という長い年数を介在しながらも、結局はマザラン文庫という名曲の演奏に成功したという意味であり、そうした図書館活動の根底に存在していたものは、若き日に描いた彼の図書館像に外ならなかったと見なすものである。

またノーデとマザラン文庫との関係も、その機縁はいわば偶然のもたらしたものであった。すなわち既述のように彼は1626年メーム議長のもとを離れてイタリアに渡ったが、滞伊2年にして父の死去に見舞われ、医学の修業半ばにしてパリに帰還しなければならなかった。しかし帰国して2年目、すなわち1630年の終り、教皇の使節 (papal nuncio) バグニ枢機卿のローマ帰任に当たって、その司書兼秘書の地位を得て再度イタリアに渡り、1642年に至る12年間の長期滞在となった。この間1633年には既述のパドヴァにおいて医学者としての学位 (M. D.) を与えられて当初の目的を果し、かつ名誉称号にすぎなかったとはいえ、この年をもってルイ十三世 (Louis XIII 1610—’43在位) の侍医 (médecin du roi) に任命されている。<sup>47)</sup>しかしながらおそらく彼は実際に医業に従事したことはなかったであろうと推測されている。<sup>48)</sup>

1642年における彼のパリへの帰還は、実は当時ルイ十三世の宰相であり、事実上フランスの政治的支配者 (1624—’42) であるとともに、また枢機卿でもあったリシュリユー (Armand Jean du Plessis Richelieu, 1585—1642) から、自分の文庫の司書となるよう要請され、その招へいに応じてであったが、帰国後間もなく (12月4日) その死去に見舞われ、ためにその後を襲って宰相となり、幼年のルイ十四世のもとで政治の実権を執ったマザランの文庫経営の任に当ることになった。こうした意味において両者の機縁もまた、いわば全くの偶然であるが、しかしその後の10年間、すなわちフロンドの乱がぼろ発し、マザランの政治的失墜、文庫の没収、ついで売却という悲運が訪れて来るまでの期間が、おそらくはノーデにとって、その生涯の中でも、‘最も幸福な時代’<sup>49)</sup>であったに違いないとさえいわれている程である。具体的には、彼が文庫長に就任した際の既存蔵書は5,000冊程度にすぎなかったが、その後のわずか1年余の短期間に、西ヨーロッパ

45) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 70.

46) Granniss, R. S.: *op. cit.*... VI, p. 17-18.

47) *Ibid.*, p. 18.

48) 注43に同じ。

49) Granniss, R. S.: *op. cit.*... VI, p. 21-22.

パの集書家ならびに書籍業者から1万4,000冊以上の図書を購入し、結局彼によって獲得追加された図書は約4万冊、合わせて4万5,000冊が1652年、高等法院側が文庫売却の措置をとった当時の蔵書数であり、フランスにおけるこれが最初の大図書館であったとともに、それはノーデ自ら、<sup>50)</sup> ‘世界においてかつてまとめられたどれよりも美しく立派で、しかも大きい’<sup>51)</sup> 図書館と名づけているものを実現し得たことであった。そしてまたこの短い歳月の間にそれを成し遂げ得たことは、まさに彼の言葉通り、“世界の不思議”中に数えられるものであろうが、蔵書の多くには念入りの製本が施され、かつマザラン枢機卿の紋章が金で押され、なお蔵書中の4分の1を占める1万2,000冊余がフォリオ版という豪華なものであった。

こうした蔵書の面のみならず、彼が成し遂げた事績の他の面は、図書館それ自体の運営の問題であり、すなわち1643年、この図書館をもってフランスにおける最初の公開図書館が出現することになったからである。<sup>52)</sup> すなわちヨーロッパにおいて、17世紀これに先立って公開されていたものとしては、オックスフォード大学のボドリー (the Bodleian ; 1603年)、ローマのアンゼリカ (the Angélique ; 1604)、ミラノのアンブローズ (the Ambrosian ; 1609年) の3つの図書館であり、マザラン文庫は、それらについて第4番目となったが、それはマザランがその年の9月前にすでに購入していた邸宅 (Hôtel Tubeuf) の1部にその文庫を移した10月の末から余り遠くない時期に実施に移されたと思なすべきであろう。その際取りあえず刊本1万2,000冊、書写本400冊が利用に供せられたといい、この文庫の扉は開放されたままで置かれ、ただ開館日時は、毎週木曜日、午前中は8時から11時まで、午後は2時から5時までの合計6時間であった。またその節ノーデが触れ言葉 (Naudé's cry) としたのは ‘生ける人々の心を拒むことのないよう、すべての世界に向けて開放される’<sup>53)</sup> の語であったという。<sup>54)</sup>

## 6

1651年2月14日という日は、ノーデにとって、事実上この文庫との決別を意味する日であった。すなわちその前月マザランの、フロンドの乱を避けてのパリ脱出に伴ない、高等法院側による文庫の差し押えが行なわれたが、この日をもっていよいよその引き渡しを迫られることになったからである。ただしその引き渡しは、時の会計院長 (Tubeuf) によって、おそらくはその邸宅

50) Johnson, E. D.: A history of libraries in the western world. N. Y., Scarecrow, 1965, p. 252.

51) Naudé G.: Surrender of the Library of Cardinal Mazarin, 1651, tr. by Victoria Richmond & John Cotton Dana. *News from France, or a description of the Library of Cardinal Mazarin. Literature of Libraries in the seventeenth and eighteenth centuries*, VI, 1907, p. 25.

この標題は英訳に際して、かりに与えられたもの。原文は1651年2月14日、マザラン文庫を引き渡したときの記録で、4折半の4ページもの。“マザラン文庫史” (Histoire de la Bibliothèque Mazarine par Alfred Franklin. Deuxième édition, Paris, 1901) に収められているという。

52) Graesel, A.: *op. cit.*, S. 33.

53) Granniss, R. S.: *op. cit.* VI, p. 26.

54) *Ibid.*, p. 25-26.

購入に伴うものと思われるマザランの彼に対する債務(8,600リーブル)の担保として、彼自身が押収する形をとって行なわれ、それは、こうした形によって文庫救済の行爲に出た厚意的な謀らいによるものであったという<sup>55)</sup>。事実ノーデも、彼とマザランとの長い交友関係に信頼して、強く彼に対し、図書散逸を防ぐにめの努力を懇請しているが、しかしながら<sup>56)</sup>‘執行猶予の期間は短いものであった’<sup>57)</sup>と記されているように、それより10か月後には文庫売却の措置が執られることになった。

いずれにしてもこの日ノーデは、本人・弁護士・執行官・老僕を文庫の各室に順次案内し、検証の終る度毎に、つぎつぎに鍵の引き渡しを行なったが、それを完了した直後について、

私は、公衆が、かくも偉大な財宝を今や奪いとられようとしていること、つぎには、マザラン卿の崇高な意図が、かくも悪しざまに報われようとしていることに思いをいたし、涙にむせびながら退出した

と記している<sup>58)</sup>。それはまことに彼にとって“悲しみに堪えない仕事”(sad task)<sup>59)</sup>ではあったが、この引き渡しに関しては、その詳細を彼自身書き綴ったものが現在に伝えられており、読む人の心を強く打たずには措かないが、しかしながら彼がここで“公衆”(public)<sup>60)</sup>という語を用い、その公衆から、文庫という偉大な財宝がいまこうして奪い去られようとしていることをもって、彼の悲歎の第一に挙げているのは、この文庫の方向づけに関連する彼の考え方をよく示している。このことは文庫がいよいよ売却されることになったとき、‘彼に残されているただ1つの方策’、すなわち誇りを捨て、自分にとっては、<sup>61)</sup>‘軽べつと憎悪の対象’である高等法院側に対し、文庫のことを思うの余り、あえて訴願の形を執って提出した既述の“マザラン文庫の売却に関し、高等法院の諸公に対する忠言”の中においても、1つの基調をなしているといつてよい。その中において彼は、マザランの意向として、この文庫を公衆に提供し、あらゆる貧しい学者、宗教人、局外者、そして学ばんとするもの、あるいは知識を求める人、それらすべての人々に対して共通の慰安として行く方針がすでに決定済みであることを特に強調し、その証拠として文庫の門上に設置する目的のもとで、すでに1684年に文字を刻み、内乱によって放置されたままになっている“刻銘”(inscription)<sup>62)</sup>の全文(約50語)を掲げている。要はマザランの決意としてこの文庫は当然公衆に開放さるべきもの、そして神への贈りものとして献呈し、恒久財産として寄付し、かつ子孫にそれは託されるものであることを明言した文章に成るものである。そしてノーデ

55) *Ibid.*, p. 28.

56) Naudé, G.: *Surrender of the Library...*, VI, 1907, p. 53.

57) Granniss, R. S.: *op. cit.*..., VI, p. 29.

58) 注56. *Literature of Libraries...*, VI, 1907, p. 53.

59) 注57に同じ。

60) 注51参照。

61) 注57に同じ。

62) 注36. *Literature of Libraries...*, VI, 1907, p. 68.

63) *Ibid.*, “ ..., VI, 1907, p. 69-72.

はさらにこの刻銘について、それには単に文面に見られる字義通り以上のものが含まれており、実はマザランには、フランスの真中に“公共図書館”(publick library)を建設しようとするさらに広大な計画があったこと、そうした意味をもこめてその文章は綴られたものであることを指摘している。そしてこのような計画の発想は、ノーデ自身がマザランを説得・勧誘した結果ではあったが、しかしそうした強力にして貴重な図書館をもつことによって子孫(posterity)は永久に、非常に恵まれた保障を享受することになるであろうとのべ、マザランのこうした意向について自分がのべて来たことの真実性に対しては、‘聖典福音書(Holy Gospels)にかけてそれを誓う用意がある’とさえ付け加えている。

このようにノーデが激しい文辞を連ねて、“文庫”と“公衆”，そして“子孫”との関係、さらには予定されている“公共図書館”について言及しているのは、要するにこの“文庫”をマザラン個人の私有財産として没収・売却しようとするフロンド側の措置に対し、“文庫”そのものはすでに個人を離れて実質的には公衆のものとなっており、現代を越えてむしろ未来・後世に伝えられるもの、結局は“公共図書館”への大きな礎であることを説いて、その措置を撤回させようとするためであった。ノーデが引きつづいて高等法院側に対し、“公衆”がいま、かくも有用にして貴重なものを収奪されようとしているのを許しておけるのか？’、‘いまなお、その芳香を全世界に向けて拡散しつつあるこの美しい花が、あなた方の手中で枯死する運命に置かれているのがまんでできるのか？’、そして最後に、

あなた方は、このように清らかで全く罪のないもの、したがって決して危害を受けるべき筈ではないもの、しかし一たびそれが喪失された場合には、全世界がその損失を分ち合わねばならないだけではなく、逆にもし、その存在を名誉とし、それに敬意と保護とを加えて行くよう命ぜられたとすれば、そうした人々からあなた方は、有罪・拘置の措置を当然受けるべき性格のものを、果して後悔することなくあなた方は、放置することができるのか？

と、きびしい詰問の言葉を連ね、それでもなお聞き入れるところとならず、終にこの文庫の壊滅という最悪の事態がもたらされた暁は、‘コンスタンチノーブルの占領ならびに略奪行為よりはもっと入念に、そして詳細に、あらゆる歴史と暦の中にその事実は記録されて行くことになるであろう’<sup>64)</sup>とつけ加えている。このことばはマザラン文庫のフロンドによる没収と売却は、歴史家によっては、1204年東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブル(Constantinople)が、十字軍の占領下におかれ、従軍将兵の略奪にあって、中世の全期間を通じ、ここに収集されて来た“世界の富”が、ついに壊滅・散逸の運命をたどったこと以上の重大な事件とされて、一層慎重に記述され、詳細に後世に伝えられて行くに相違なく、文化の破壊という点において、きさに歴史的罪惡の最たる事態にいまや立ち至らんとしているとの意味であるが、ノーデは、この“訴願”の文章を結ぶに当って、この際高等法院側が執るべき態度は、その昔、ローマの初代皇帝アウグスト

64) *Ibid.*, *Literature of Libraries*, VI, 1907, p. 73.

ゥス (Augustus, 27 B.C.—14 A. D. 在位) が、詩人ヴァージル (Virgil, 70—19 B.C.) の詩稿“イーニッド” (*Aeneids*, 12巻) に対してとった態度、そしてその際用いた1つの言葉に尽きると記している。すなわちヴァージル自身は、この叙事詩がなお未完成のままであったことを理由に、友人に対し焼却を依頼し、それを遺言としたにもかかわらず、皇帝の命によって後世に伝えられることになったが、この皇帝にとっては、その詩稿を無きものにしてしまうとか、あるいは救済するかは、全く問題とするに足らず、‘それは子孫のためのものである’ とする一語をもってその運命が決せられたからである。ノーデも、いま自分が訴えようとしているのもは実はこのことに外ならず、マザラン文庫もその詩稿と同様、それはすべての子孫に対するものである以上、当然この故事にならうべきものであると忠言している。

このようないわばノーデの、必死の努力にもかかわらず、高等法院側が1651年12月29日をもって発した布達は撤回されることなく売却はすすめられ、10ヵ月後の1652年10月におけるフロンドの乱鎮定を待つことになった。この日ルィ十四世はパリに入城したが、マザランのパリ帰還はそれより4ヵ月後の1653年2月のことである。そして彼が緊急に着手した事業の中に、“文庫”再建の問題があったが、ノーデはすでに触れたように、それに参画することを得ないままにその生涯を閉じた。しかし彼が3,500ルーブルをもって買いとっていた医学関係の文献は、彼の遺志によってマザランに返却されており、マザランもまたノーデ自身の蔵書をすべて買いとり、したがって彼が所蔵していた書物の全部 (約8,000冊) は、現にマザラン文庫中に残存し、その多くのものには、彼の署名がしるされているという。一方マザランの政治的地位の回復・文庫再建のことが伝えられるとともに、既述のスウェーデン女王クリスチナが、いち早く自分の買いとっていた書写本のすべてを返還したのを初め、他の買取り者たちもその例にならい、再建に着手してから7年目の1660年における蔵書数は4万5,000冊、すなわち旧蔵書のほとんどを回収し得たことになった。<sup>65)</sup> しかしながらその年は、マザランがその多難であった生涯に終りを告げる前年に該当しており、結局その“文庫”は、その遺志に基づき生前彼が設立を準備していた学校すなわち普通“マザラン学校” (*Collège Mazarin*) の名で知られている“カトル・ナシオン学校” (*Collège de Quatre-Nations*) の図書館とすることになってはいたものの、実際に蔵書がこの学校に移されたのは、それから330年近くも経過した後のことであった。そして1688年から1791年に至る103年間は、ソルボンヌ大学 (*Université de Sorbonne*) の所管に属し、フランス革命 (1786—99) に際して革命政府が、教会図書館・亡命貴族たちから没収した図書 of 追加を受けて蔵書の強化が図られ、もって今日に及んでいる。そして現にマザラン文庫中の広い1室はノーデの名を冠した記念ホールであり、また彼の胸像が置かれているところでもある。このようにマザラン文庫の存亡に当って、ノーデがいわば生命をかけてそれを守らんとした彼の行動と言辞の中には、その抱懐していた図書館観の究極的なものがうかがわれ、それはまた若き日の図書館像の上に新たな次元を加えるものであった。

65) 注43に同じ。

すでに言及したように、ノーデの“意見書”は、1626年に執筆され、ド・メーム議長に捧げられたものであるが、この書の内容構成に関してティラーは、‘ノーデは決して百科全書的であろうと努めた訳ではなく、また明らかに彼は、執筆中にふと心に浮んで来た文献とか著者の名を、実例としてはほんの一寸書き留めておいた程度の、きわめて軽い筆致でこの書物を綴っており、ために網羅と完璧とを期したものではなかった’<sup>66)</sup>とのべている。事実またノーデ自身も、こうした“諸意見”が書物の形態を執ることになったのはいわば偶然の結果であり、それはメーム文庫内で、過去何ヵ月かにわたって続けられたたまたまの討論 (argument) がその基になったと記している。<sup>67)</sup>すなわち、ノーデ単独の著述というよりは、むしろ彼が図書館の問題について人々と論じ合ったところを取りまとめた形でこの書の草稿ができ上り、したがって夢にもそれを公刊しようと考えた訳ではなかったが、ただそのコピーを希望して来た多くの友人たちを満足させるためにも、同時にまたその度毎に筆耕を雇傭する経費を免がれるためにも、印刷に付しておいた方が、かえって得策であるとの結論に到達したまでの事であったと語っている。

しかしながらノーデがこの“意見書”をドメーム議長に捧げたのは、いうまでもなく、メーム文庫のことを慮り、その将来の発展を願ってのことであった。このことに関して彼は同議長に対し、

私が貴下に喜んで受取って頂けるような何かをしなければならないという切なる願いを抱いた所以は、外ならぬつぎの理由によるものである。すなわち何よりもまず、書物の知識に精通している多くの博識家に共通している意見、ならびに私自身の限られた研究と見聞からここに提供することのできる最も著名な図書館人たちによって、実施に移されて来た幾つかの実際、この2つの事柄を取りまとめるようにとすすめられ来たこと、つぎには、首尾よく図書館が、立派な、そして豊かな事業となっていくため、人々が従わねばならない原則と実際とを貴下の前に置くことができるかも知れないからである<sup>68)</sup>

とのべている。すなわち図書館についてのすぐれた意見と実際とを取りまとめて参考に供し、もってメーム文庫の将来における成功を願う意をこめて捧げられたものであった。

このような経緯から、結局は彼がフランスを離れてイタリアに赴いた直後の1627年この書は世に現われることになったが、その内容と構成についてツォラーは、ノーデ以前に在っての図書館論 (Bibliotheklehre) では、個々の部門 (Zweige) を全体として組織的に、しかもきちんと整理することに考え及んだ人はなく、彼とてももちろん完全な形で組織的であり得たとは言えないまでも、その立場は包括的かつ明解であり、その意味において図書館学の基を切り開いて行った

66) Naudé, G., *Advice on establishing a library*...1950, xii (*Introduction*):

67) *Ibid.*, xvii (*To the reader*).

68) *Ibid.*, p. 1-3 (*Naudé's address to his patron*).

開祖 (Gründer) としての位置づけを行なっている。<sup>69)</sup> ノーデ自身もこの点については、この書の巻頭に付しているド・メーム議長宛の短い (約 4 ページ) あいさつ文 (adresse) の中で、この書に付されている標題に関し、

いま深い愛情をこめて捧げようとしているこの書物に対して、いまだ耳にしたこともない標題を付していることが、決して私には無分別なことのようには思われない。それはほとんど無数といってよい程沢山の人々が手にペンを執って来たにもかかわらず、私の識る限りにおいては、図書の選択・その獲得方法、さらには、それらの図書を、立派でかつ威厳ある図書館のために、一番役に立ち、同時にまた魅力ある方法で配置することについての著述を行ない、もって人々がその後に従って行くことのできるようなものを公にした人は、今日までのところ誰一人として現われて来なかったことが確実だからである<sup>70)</sup>

とのべている。すなわちそうした意味においてはこの書物が歴史上最初のものであり、それ故に未だ使われたこともなく、したがって耳新しい標題をつけざるを得なかった事情に触れたものである。

ノーデのこの“意見書”は、上述の“あいさつ文”を先導として、何故図書館はつくられるのか？、すなわち図書館存在の意義に筆を起し、それを設立して行く上に必要な諸準備、蔵書の数、図書の選択、図書の獲得、図書館の建築とその場所、図書の配置、装美と装飾、図書館の目的という順序で章を追って記述されている。その初版は全文 166 ページ、新書判よりもなお小形 (16 1/4 cm) のものであるが、第 1 章についてツォラーは、要するにそれは“図書館機関” (Bibliotheksinstitut) の重要性とその文化的保護 (Mäzen) の問題を取扱ったものであると記している<sup>71)</sup>。しかしながら彼が古代・中世における著名な図書館について概説し、それらのうち多くが、帝王あるいは王侯としての“栄光”をそのねらいとするものであったことに言及し、結局図書館がその名声 (reputation) を後世に遺す所以は、それが一般の人々による利用に委ね得る意味での、すぐれた図書館を築き上げて行くことに在る点を強調しているのは、図書館の意義についての、ノーデの根本的な姿勢を示すものである。すなわちすでに触れたような、図書館と、公衆ならびに未来 (子孫) を結びつける彼の思考は、実はこの若い時代の発想であり、しかもその図書館思想を貫く基本線を形づくるものといってよい。

8

また図書館設立についての諸準備に関し彼の説くところは、要するにそれに必要なことのすべてを、自分一人で工夫することの無駄と愚とを戒めしたものであって、1 つには多くの人々、すなわち文人、あるいは穏健にして思慮の深い人々などが、直接に助言・忠告を行ない得るような組

69) Zoller, E.: *op. Cit. Serapeum* 9(1848), S. 134.

70) 注68に同じ。

71) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum* 11 (1850), S. 140.

織を制度的に確立しておくことと、もう1つは、図書館のことに触れている既往の諸文献を丹念に収集し、たとえどのようなささいな事であるにせよ、その中から貴重な示唆を吸収する努力を積極的に行なっていくことの必要性に言及している。また“蔵書の数”という問題については、過去の著名な図書館が専ら蔵書の巨大量をその誇りとして来た点を指摘して、図書館の真価はその数量によってではなく、むしろそれがもつ重要性和質によってであり、あたかもそれは“法律と法律家の意見”に比すべきものだとのべている。おそらくその意味は、沢山の法律がつくられていることが、その国家のすぐれていることを意味せず、かえって立派な法律が数少く存在している国こそ望ましい姿であり、法律家の意見にしても、少数のしかもすぐれたものをもつこそ、専門家としての優秀性に連なるとするものであろう。“図書の選択”についても、彼は特定の価値観や基準を基にした選び方に強く反対し、あらゆる意味における偏見を排除しての、不偏不党の態度こそ、まさにそのあるべき姿であるとし、したがって図書館の蔵書は、その内容において“普遍性”が保たれていなければならないことを強調し、“図書の獲得”の章においては、主として蔵書の質的向上と強化の具体的な方法に言及しているが、彼はそのことを可能にするのは既存蔵書の基礎の上においてであり、したがって確実な保存なくしてそれはあり得ないとの前提のもとで叙述をすすめている。しぜん彼の場合は“保存”と“獲得”との2つは、ともに同一価値の上に立つものであったが、“獲得”して行く上の重要事項としては、まとまった集書の一括購入の問題を初めとし、文献についての広い知見を開拓して行くことの必要性、古典の探求、各種文庫の実地調査の重要性に触れ、かつ獲得すべきものは、決して図書の形態を執るものに限らず、それに劣らず重要な資料としていわゆる“短命出版物”(ephemera)、すなわち風刺文・片面刷り・げき文・切り抜き・下書きの類を掲げており、なお、書物の製本とその装飾に必要な以上の経費を浪費することの無駄を避けて、その分をむしろさらに広範な資料の獲得に充当すべきであることを説いている。

また“図書館の建築とその場所”においては、まず図書館の占めるべき地理的・環境的位置の問題がとり上げられている。そして避けるべき条件としては、喧騒・不便・不潔・悪臭が、好ましい条件としては、ゆとりのある場所、すぐれた採光、それに静寂が挙げられ、建築設計上の主要課題としては窓のとり方を、また他の建物との併存式に抛る場合には、上階・下階を避けて中階床をむしろ選ぶべきであることを主張しており、それは前者が暑熱・雨・雪などによって、後者は湿気によって、とくに図書館にとっては好ましくない影響をもたらすとの見地からであった。さらに“図書の配置”は、要するに図書館の中において持つべき各図書の順序ならびに配置の問題を取扱い、結局は分類をその課題としたものであるが、彼は書物が図書館に収蔵されていることの意味は、その書物に対する必要性が生じたとき、直ちにそれを役立て得るために外ならず、そのためには、書物は主題事項に従ってか、あるいはまた、その指定された場所を見つけ易い形で分類され、かつ配置されていなければならないという立場で叙述が進められており、このことなくしては、たとえ5万冊の図書を所蔵していたとしても、それは図書館の名に値しないと

のべている。そして結局彼は、当時行なわれていた、例えば書物を道徳(morals)・科学(science)・信仰(devotions)という3つの“類”のもとにおく“3分法”(triple division)を排撃し、学問の分科(faculties)、しかも‘普通に大学で教えられている形での分科’に則して独自の分類法を展開している<sup>72)</sup>。しかもそれは、‘図書の配置は、それが常に最善のものであるためには、最も簡便にして複雑性に乏しく、きわめて自然のものであり、かつ最大限に実用性に富んだものでなければならぬ’<sup>73)</sup>と私は考える’という言葉に引きつづいて、具体的に主類の設定と細目の展開に言及する叙述の形を執り、細部の事項に及んでその所見を開陳している。まことにセイヤーズものべているように、<sup>73)</sup>ノーデの分類法は、今日においては、人々の古典的な関心を引く程度のもものになってしまったとはいえ、しかし彼によってここで展開されている分類についての“格言的なもの”(precepts)は、依然として現代においても、注目されねばならない貴重な内容を含むものと言わねばならないであろう。

9

また“装美と装飾”の章は、要するに図書館と、図書の製本とについて、極端に華美をこらすことの不必要な所以を説き、それに消費する費用を、すぐれた書物の購入に充当することの得策を述べたものに外ならないが、しかし彼のこうした言葉を正しく理解するためには、図書館における書物の蔵置形態の上にはすでに根本的な変改がもたらされている事実を前提としなければならないであろう。すなわち時代はすでにそれ以前における蔵書の展列方式(display system)から脱して、壁面を用いての書架排列の段階に移行して来ているからである。このことに関連してノーデは、

天井に黄金を塗り、壁には象牙やガラスを張り、棚板にシーダー材を用い、床に大理石を使用すべき必要性はずっと少なくなった。というのは、この種の虚飾は、すでに時代離れのものとなってしまうからである。すなわちかって書物は机上に展列される習わしであったにもかかわらず、現在ではすっかり壁面を覆い隠す書架上に排列されるようになって来たためである。したがって、そうしたきらびやかな装飾の代りに、例えば製図器械・地球儀・地図・天体儀・絵画・はく製動物・岩石、その他きわめて少額の経費をもって、折に触れ、ごく普通に収集して行くことのできる自然・人工双方の珍奇な品物を置くことが可能である

とのべている。要は、広い床面に机をおきその上に書物を展列して来た従前の方法に代る壁付書

72) エドワーズ(Edward Edwards, 1812-1886)によって紹介されているノーデ分類法の主類は下記の通り(Memoirs of Libraries, Vol. II, p. 772).

|               |                |                        |
|---------------|----------------|------------------------|
| Theology.     | Geography.     | Council and Canon Law. |
| Medicine.     | History.       | Philosophy.            |
| Bibliography. | Military Art.  | Politics.              |
| Chronology.   | Jurisprudence. | Literature.            |

73) Sayers, W. C. Berwick: An introduction to library classification...9th ed., Lond., Grafton, 1955, p. 86.

架方式が一般化したことを指摘して、伝統的な考え方がすでにその意義を失い、したがって新しい事態に則して是正されねばならない点を強調したものである。このことはまた同時に、図書そのものに対して多くの費用を投じ、ぜい美に製本を施して来た伝統的な風潮に対しても反省を求める言葉と直接結びつくものである。この点についても彼は、

何よりもまず私の言いたいのは、図書に関する限り、製本のために多額の経費を費す必要はないということである。言い換えると、製本のために費消する金銭を節約しておき、格安で・最善の印刷になる書物を、見つかり次第入手できるようにした方がむしろ得策である。しかしもし来訪者の眼をただ満足させたいというのであれば、製本したいと思う書物の背 (back) を、羊皮、子牛の皮、あるいはモロッコ革で覆い、金の条線や花形模様で装飾を施し、そこに著者名を誌すようにすればそれでよく、…

とのべている。すなわち、いずれにしても総皮装丁とし、しかも表紙の全面に装飾を施すがごとき必要は全くなく、半皮装丁をもって事足り、それとても実は、来訪・参観の人々の眼を楽しませることにその意義を見出す人々の場合に限られるとするものである。ここでは彼が書物の背部のみに装飾を施すことの意味を残している事実が、上述の図書の蔵置形態における変改という観点から指摘されねばならないであろう。

アーウィンによると、図書館の蔵書を、現代のように直立の形に置き、背の部分に前面に突き出す方法を採用するようになったのは16世紀の末であり、イギリスではようやく“王政復古” (the Restoration, 1660年) の頃になって人々は、この方法が利用者にとって、書物を取り扱う上に便利な配置方法である許りでなく、同時に書物の置かれている部屋的美観という面でも優っていることを理解するようになったという。<sup>74)</sup>すなわちこの方法の起原を切り開いた国はフランスであり、しかも規模の大きな図書館で初めてこの配架方式を採用したのが既述のトゥー文庫であって、16世紀の末までには、すでに刊本8,000冊、書写本1,000冊を所蔵していた。しぜんノーデがその“意見書”を公刊した1627年当時<sup>75)</sup>に在っては、フランスの場合、この方法が“一般的な慣行”になっていたという。彼自身が上記引用文中において、‘かつて書物は机上に展列される習わしであったにもかかわらず、現在ではすっかり壁面を覆い隠す書架上に排列されるようになって来た’とのべているのはこの事に言及したものであって、その結果は、書物が1冊1冊平らに置かれ、したがって表紙に、例えば“カメオ浮彫り” (cameo)・“盛り上り装飾” (boss)などを施しての丹精な仕上げはもはや必要とせず、それに代って背部装飾 (spine decoration) の時代へと移行することになった。もちろんその間には、いわゆる“小口装飾” (fore-edge decoration) という、いわば過渡的段階が存在する。すなわち書物が書架上に縦に配列されるようになって以後の当初の段階は、現在の方法とは逆に、前小口 (fore-edge) を外に向ける方法であり、しぜんこの前面小口に標題その他種々の装飾が加えられ、背部はそのままに放置されたが、つぎの

74) Irwin, R.: The heritage of English library, p. 266, 271.

75) *Ibid.*, p. 272.

段階はすなわちこの前小口と背部との要するに交替であって、背部を外に向けての配列、したがってこの部分に対する装飾への変更である。そしてこの小口装飾が背部装飾にその道を譲ったのは、ほぼ17世紀の半ば頃であったという。<sup>76)</sup>ノーデが製本の問題に関連して主張している言葉は、このような時代的な背景のもとで為されている点に注目しなければならないであろう。

最後の“図書館の目的”という章も、結局は図書館員の責務と、つぎに目録の必要性について言及したものである。実はノーデも、他の多くの人々が論じているように、図書館の機能も結局は“人”の問題に帰着するという考えに到達しており、その立場において図書館員の問題を取上げている。すなわちこの“意見書”の各章において論じて来た事柄も、また書物のためにどんなに多額の経費を準備し得たとしても、‘もし図書館員が、その蔵書を公衆利用のために捧げようとしなかったり、さらにはまた書物から何んらかの利益を吸収し得る人であれば、どのように身分の低いものであろうと、そうした人々から決して書物を抑制してはならないという風な考え方をしないとしたら、すべては結局無になる’とのべているのは、図書館員の“人”としての本質的な問題に触れたものである。そしてこの観点から彼は、図書館員を、一方においては懇篤な態度をもって、しかし他方においては、必要なあらゆる警戒のもとで、図書館の公衆利用を司るものであると規定したあと、それ故に図書館員には、何よりもまず書物についてすぐれた知識をもち、しかも立派な人物・かつ学者である人が選ばねばならないこと、しぜんそうした人物に見合った形で俸給と地位、さらには司書という称号が与えられ、そうした身分を保持することをもって、みづから名誉ともまた誇りともし得るものでなければならないと述べている。

ついで図書館員のなすべき‘最も必要なこと’として蔵書目録の作成に言及しているが、彼はその種類としてはまず主題目録を、つぎに著者による語順目録の2つを基本的なものとして掲げ、さらに図書館員に対して利用者は自由に接触でき、もって遅滞・困難を体験させることなく、効果的・能率的にその目的を達し得るよう配慮されることの必要性を強調している。

## 10

このような内容をもつ“意見書”の著者ノーデが、19世紀の前半ドイツにおいては、図書館学の開祖とみなされていることについてはすでに言及した。それはこの書が全体として、図書館に関する本質的な主要課題を採り上げて論究した最初のすぐれた文献であることによるものであったが、同時にこの書の内容をなしているものの中で、ティラーが、‘現代の読者にとって、おそらくは最も印象的な部分’<sup>77)</sup>とのべているのは、要するにノーデの蔵書構成論であり、アーウィンによつては、これこそノーデが図書館に対して抱いていたいわば“一般原則”(general principle)であって、他はこの原則のもとで展開されている各論とみなす表現がなされている。<sup>78)</sup>ヘッセルが

76) *Ibid.*; Encyclopaedia Americana, 1961 ed. (*Fore edge painting*).

77) Naudé G.: *Advice on establishing a library*...1950, x (*Introduction*).

78) Irwin, R.: *The English library*..., p. 164.

ノーデのそれを“普遍的図書館” (Universalbibliothek) の思想として受け取っているのも、<sup>79)</sup> 実はノーデが蔵書の真に在るべき姿として、あらゆる意味における普遍性を強調したその立場を弁明したものに外ならず、そうした立場を最も鮮明に提示しているものとしてティラーは、ノーデが篤信のキリスト教徒であったこと、しかも彼の生涯は、そのほとんどが、枢機卿といういわば最高位の聖職者たち (plelates) と深く結びついたものであったにもかかわらず、異端の書もまた図書館の蔵書においては、当然の位置を占めるべきものと主張しているその発言に言及している。<sup>80)</sup> ただこのような基本的立場を、‘ノーデの自由にして偏見のない心’の現われと解しているその言葉自体に誤りはないとしても、彼の蔵書構成論、具体的には、蔵書の普遍的性格を唱道したその立場は、単に個人に具った性格とか、あるいは一個の人柄のもとで捉えるべきものではなくて、彼が終始“意見書”の中で一貫して保っている歴史的事実への、同時に自らが位置している歴史的現実に対する深い省察こそ、その根底につちかっているものと言わねばならないであろう。異端の書に対して図書館の蔵書中に正当な位置を確保することは、敬けんなキリスト教徒としてのノーデにあっては、かつて異教徒がキリスト教文献に対して迫害を加えた歴史的事実、逆にまたキリスト教的立場から、異教徒による文献はもちろんのこと、俗界書に対しては差別的な態度を執って来た歴史そのものに対して行なったいわば心底からの抗議である。一方また彼の時代は、“30年戦争”の形を執って宗教戦争の余じんがなおくすぶり続けており、ひとしくキリスト教徒ではありながら、抗議者としての立場を執るプロテスタントによって、旧教文献・教皇主義文献のまっ殺を謀った数々の生々しい事実が、そのまま現実によみがえりつつあった。したがってノーデにおける異端の書擁護の弁は、そのままあらゆる意味において、反対の極に在る思想と文献の擁護に連なるものであり、かくて彼の場合は、宗教的・俗界的、キリスト教的・異教的、科学的・非科学的、正統哲学派 (orthodox Aristotelian philosophy)・非正統革新派 (‘novators’), 正常な主題・異常な主題 (out-of-the way subjects), 稀こう・通俗、新・旧、原著・翻訳書を問わず、これら両極の文献が、同じ重要性をもって図書館の蔵書中にその位置を占めるべきものとされているが、ヘッセルは特にノーデが、稀こう性 (Kostbarkeit) をもって蔵書の第一義的なものと考え、また新しいものよりは古いものへの偏愛に終始していた当時の一般的風潮を打破するために闘った点の特記している。<sup>81)</sup> いずれにしてもこのような彼の蔵書構成論が、後人の注目を引くところ最も多く、その図書館に対して抱いていた一般原則は、結局ここに帰着し得るとさえ解釈されている程に、重要な意義がそれに付与されている事を示すものである。

マソンによってこの“意見書”は、近代的な図書館経営 (bibliothéconomie) の基礎となるべきものを説いた著述とされているが、同時に彼はまたこの著述が公にされた1627年という年は、

79) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 70.

80) 注77に同じ。

81) 注79に同じ。

82) Masson, A. et Salvan, P.: *op. cit.*, p. 26, 33.

単にフランスのためだけの年ではなく、ヨーロッパすべてのためのものであるとして、この書が<sup>82)</sup>1661年イギリスの日記作家イーヴリン(John Evelyn, 1620—1706)によって英訳されたことと、つぎにはドイツの“精神的英雄”(Geistesheroe)<sup>83)</sup>であり、同時にまた17世紀の末から18世紀の初頭における“最も偉大な図書館人”<sup>84)</sup>でもあった哲学者ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646—1716)に対し、思想的影響を与えたことを特記している。そしてこの2人のうち、イーヴリンの方は直接図書館の運営に携ったことはなく、実は熱心な王党派でもあって、ためにクロムウェル(Oliver Cromwell, 1599—1658)が次第に勢力を得た以後の内乱期は、そのほとんどを国外においてすごした人であった。そして彼がこのノーデの著作を英訳するに至った機縁をなしたのは、たまたまこの書の再版が、ノーデの友人であるヤコブ(Louys Jacob)によって出版された1644年当時パリに滞在していて、一読非常に感激を覚えたためであったと伝えられている。<sup>85)</sup>しかしながらロンドンにおけるその英訳本の出版は、それからでも17年を経過した1661年のことであつたし、初版の発行との間には34年という長い年数が介在している。しかも印刷の途中、オックスフォードの印刷業者がその訳稿を紛失するという事態もあって、ために出来上った訳書に対しイーヴリンは極めて不満足であり、そのためすで出回っている書物を自ら買い占め、廃棄の措置が執られている。ティラーが、‘この英訳本の普及範囲は決して広範なものではなかった’<sup>86)</sup>と述べているのは、このような背景に触れたものであるが、いずれにしてもこの訳書がイギリスに与えた影響は後年のことに属し、したがって、原著、すなわち初版(1627)、再版(1644)、ついで英訳本に先立ち、ハンプブルグにおいて出版されたイエッヘル(Jöcher)によるラテン語訳(1658)を通じてのイギリスへの影響が当然すでに存在していたと見なければならぬであろう。しかしながらアーウィンによつては、この英訳本が世に現われた1661年は、まさに“王政復古”の実現を見た翌年に該当しており、イギリスはその政治的内紛の故に、フランスと比較して、図書館発展の上には数十年の遅れを執りながらも、この1660年代に入るに及んで、実は蔵書の増大を図る方向が、漸くにして堅実な軌道を見出し得た時でもあって、イーヴリンはその機を正しく見極め、かつ将来の発展を見越し、“先見の明”をもってこの書の出版を企図したとの見方も行なわれている。<sup>87)</sup>しぜんノーデのこの“意見書”がイギリスに与えた思想的影響という観点から言えば、その初期の段階にあっては、原著(初版および再版)ならびにラテン語訳の2つを通じて、そして後にはこの英訳本を通じての、時代的には2つの段階にわたっているが、しかし初版ならびに再版はノーデ在世中のものであるのに対して、ラテン語訳の完成はその死後5年目、すなわち彼に対する回想の情なお新たな時代に、また英訳本の出版は、イギリスが新たに迎えた図書館の発展期をその背景としており、したがってそれぞれに異った意味をもって人々の受けとると

83) Steudtner, Kurt: Über Leibniz als Bibliothekar. *Über Bücher, Bibliotheken und Leser*..., S. 207.

84) Irwin, R.: *The English library*..., p. 169.

85) 注43に同じ。

86) Naudé G.: *Advice on establishing a library*..., 1950, xii (*Introduction*).

87) Irwin, R.: *The English library*..., p. 163, 203.

ころとなったであろう。

英訳者イーヴリンが、直接には図書館との関係をもたない人物であったのと異なり、ライプニッツは、偉大な哲学者ではありながらも、彼の生涯における大きな部分は、図書館人としての身分と職務とによって占められている。グーラウエル(Gottsohalk Edward Guhrauer, 1809-1854)によると、ライプニッツと図書界とのいわば“面識”(Bekanntschaft mit der Bücherwelt)は、彼がまだ6歳であったその幼年時代にさかのぼるといふ。そしてライプツィヒ大学の哲学ならびに道徳の教授であった父(Friedrich Leibniz, —1652)の死去によって、生前に在っては入室を許されなかったその文庫を自由に利用し、とくに古代著者・哲学者の豊富な著作に親しむことができたこと、そして彼における博学な著述と図書学的知識の基礎は、このようにしてすでに幼少の頃から<sup>88)</sup>つちかわれて来たものであったことに言及している。しかしながら、ストイトナー (Kurz Steudtner) も述べているように、<sup>89)</sup>彼における“司書活動の第一歩”(erster Schritt zu einem bibliothekarischen Wirken)は、1667年彼が21歳の時、たまたまボィネブルグのクリスチアン男爵 (Baron Johann Christian von Boineburg; *Freiherr* von Boineburg, —1672) と知り合い、爾後その死去に至る間の5か年、この人との間に親密な関係が続けられることになったことから始まっている。グーラウエルによると、このことこそ正にライプニッツの生涯にとっては“決定的なもの”(entscheidend)になったという。<sup>90)</sup>その意味は、彼の場合、大学を卒業し、学位を得たその前年(1666)の段階においては、‘司書という地味な職業’(bescheidene Tätigkeit eines Bibliothekars)を求める気持は全く無かったにもかかわらず、結局はその生涯の大部分を、図書館と共に過す結果になったからである。彼の場合においても、図書館との機縁は全くの偶然によってもたらされたといえるであろう。

上述のボィネブルグ男爵との出会いというのは、彼が大学を卒業して生地を離れ、ニュルンベルグ(Nürnberg)への短期の遊歴(*Vaganten-Debut*)を試みた際の全く偶然によるものであった。そしてこの人において真実の知己を得、同時にまた1667年この男爵に案内されて当時フランクフルトへも、またマインツへも至近の地にあったマインツ選挙侯フィリップ (Johann Philipp von Schönborn, —1673)の公邸を訪れ、その結果は、ライプニッツが熱望していた通りに、選挙侯の学問上の顧問役(gelehrter Ratgeber)、すなわち枢密顧問官職(Hofrathsstelle)の地位<sup>91)</sup>を与えられることになったが、<sup>92)</sup>このこと自体が実は、彼における司書活動の第一歩を印するもの

88) Guhrauer, G. E.: Bibliothekarisches aus Leibnizens Leben und Schriften. *Serapeum* 12 (18-51), S. 1. なおこの論文は42ページにおよぶ長文のものであり、つぎの3号に分載されている。

Zwölfter Jahrgang:

Nr. 1. Den 15. Januar 1851. (S. 1-16).  
2. Den 31. Januar (S. 17-30).  
3. Den 15. Februar (S. 33-42).

89) Steudtner, K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 208.

90) Guhrauer, G. E.: *op. cit.*, *Serapeum* 12 (1851), S. 2.

91-93) 注89に同じ。

となったのである。すなわち事の発端はもちろん当時このマインツ選挙侯国の宰相 (Kurmainzischer Minister) であり、また愛書・蔵書家として著名であったこの男爵によって切り拓かれたものではあったが、しかしながらライプニッツはまだ21歳という青年であり、従って彼に対して公に与えられた官名 (Amtstitel) は図書館長 (Bibliothekar) であり、<sup>93)</sup> ボィネブルグ文庫 (Boinebursche Bibliothek zu Mainz) を主宰することになったからである。ボィネブルグ男爵にとってこのライプニッツを得たことは、“幸運なる神の摂理” (glückliches Geschick) とも称すべきものであったと記されている。<sup>94)</sup> しかしながらライプニッツ自身によっては枢密顧問官職を本務とし、図書館長の方を兼官職 (Nebenamt) とみなす表現も行なわれていたことが伝えられている<sup>95)</sup> が、事実彼は選挙侯を補佐して、法典の改正を始めとし、多方面におよぶ行政事務に参画したばかりではなく、1672年の春には、選挙侯の政治使節 (kurmainzischer politischer Gesandter) を命ぜられ、フランス王ルィ十四世の侵略を阻止する使命を帯びてパリに派遣されている。

このように5か年間にわたったライプニッツのいわゆるマインツ時代は、2つの側面をもって構成されているが、その時代も実は、彼がパリに赴いて約半年後の1672年12月にはボィネブルグ男爵の、翌1673年には引きつづき選挙侯の死去に見舞われ、この侯国におけるライプニッツの生活根拠が切断されたことによって終りを告げるようになった。

なおボィネブルグ男爵について付言すると、彼は“マインツの神託者” (das Orakel von Mainz) と呼ばれ、<sup>96)</sup> 博覧・博識をもって著名であり、そのこと自体がボィネブルグ文庫の豊富な蔵書によって獲られたものでもあったが、その集書は4分科 (神学・法律・医学・芸術) にまたがり、当時のドイツにおいては、‘最も立派で、内容面から言っても一番豊富な個人文庫’であり、ヨーロッパの著名な学者、例えばオランダの法学者グロティウス (Hugo Grotius, 1583—1646)、フランスの古典学者サルマシウス (Claudius Salmasius; Claude de Saumaise, 1588—1653)、現代統計学の先駆であるドイツのコーンリング (Hermann Conring, 1606—1681)、スイスの言語学者ホッティンガ (Johann Heinrich Hottinger, 1620—1667) などとも緊密に連絡を執り、あるいはまた当時図書交易の中心でもあり、書籍市の開催地でもあったフランクフルト (Frankfurt am Main) の近親を煩わして図書の入手につとめ、さらにはまたマインツ選挙侯を始めてする諸侯・諸王の寄贈を受けて、蔵書の豊富を誇り得るものになったという。<sup>97)</sup> ライプニッツが図書館長として迎え入れられたのは、いよいよ蔵書がその数を増し、整備 (Einrichtung) と整理 (Anordnung) の問題に心を痛めていたときに該当している。

このボィネブルグ文庫におけるライプニッツの事績としては、何よりも彼がこの図書館の蔵書目録 (Gesamtkatalog) を作製したことが採り上げられる。もちろんそれはボィネブルグ男爵の要請に基づくものではあったが、しかしライプニッツにとってこの仕事は、‘初めての大きな司

94) Guhrauer, G. E.: *op. cit.*, *Serapeum* 12 (1851), S.3.

95) 注89に同じ。

96・97) 注90に同じ。

書の労作’ (erste große bibliothekarische Arbeit)・“処女作業” (Erstlingsarbeit)<sup>98)</sup>としての意味をもつものであり、それは全蔵書に対する体系順の件名目録(systematischer Real-Katalog),すなわち今日でいうアルファベット順件名目録(Schlagwort-Katalog; alphabetischer Sachkatalog),に該当し、この目録の故に彼は、‘当該世紀におけるドイツ第一級の件名書誌学者’ (Schlagwortbibliograph)<sup>99)</sup>と呼ばれているほどである。実際には、およそ 10,000 におよぶ書名を採択した上での作業を基に、書名中に含まれ、しかも書物の内容を直載に伝える簡潔語を取り出し、その名辞に配列の原理を置く目録であり、フックスによると、すでに15世紀、修道院文庫にその起原をもつ形態のものであるという。<sup>100)</sup>

## 11

すでに触れたように、ライプニッツとマインツ侯国との公的な関係は、1673年選挙侯の死去と共に事実上切断されることになった。それからあと、1676年に至る間の、パリ滞在中のことに関しては、あるいはしばらくの間、フランス王室図書館で仕事をもっていたとの見方もない訳ではないが、それは臆測の域を出ず、グラウレルによれば、‘図書館との特別の関係はなかった’<sup>101)</sup>と記されている。いずれにしても“マインツ侯国政治使節”としての、この短いいわば“外交的幕合い” (diplomatisches Zwischenspiel) を中にはさんで、ライプニッツの人生ならびに図書館人としての生涯は、つぎの段階であり、しかも40年の長期に及び結局は死去の年につらなるハノーヴァー侯国との結びつきへと移行することになった。この間の経緯についてグラウレルは、ライプニッツがマインツに在ったとき、すでにフォン・ボィネブルグ男爵を通じて紹介されていた学識の高い公爵フリードリッヒ (Herzog Johann Friedrich von Honnover) の招へいが1676年の秋、彼をパリからハノーヴァーへ、顧問官という称号と身分をもつ公爵の図書館長 (Bibliothekar des Herzogs)<sup>102)</sup>として導き入れた

と述べており、フリードリッヒ (Herzog Johann Friedrich von Braunschweig-Lüneburg, —1679) の積極的な招致による結果と見なす立場をとっている。これに対してストイトナーは、ボィネブルグ男爵・引きつづき選挙侯と相つぐ2人の死去によって、ライプニッツが失官・失職の運命に置かれたことに言及したあと、結局はフリードリッヒから彼に対し援助の手が差し延べられたこと、しかし事の経緯は、1673年パリ滞在中のライプニッツからこの公爵あてに請願書が提出され、それに対して快諾の返書が寄せられたとして、むしろ逆の解釈をとっているが、いずれに<sup>103)</sup>

98) Steudtner, K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 208, 209.

99) *Ibid.*

100) Fuchs, Herman: *Bibliothekverwaltung*. 2., verbesserte u. vermehrte Aufl. Wiesbaden, Otto Harrasowitz, 1968, S. 170.

101-102) Guhrauer, G. E.: *op. cit.*, *Serapeum* 12 (1851), S. 6.

103) Steudtner, K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 208.

してもその後の3年間は、パリおよびイギリス(1673年1月ロンドン訪問)において研究と著述に従事することを許され、その間イギリスの王立協会の会員(Akademie-Mitgliedschaft)にも推されている。

ライプニッツが新しく館長に就任することになった“ハノーヴァー王室文庫”(Königliche Bibliothek von Hannover)は、1660年頃フリードリッヒによって創設されたものであったとい<sup>104)</sup>う。しかしながらライプニッツがここに赴任した当時であって、蔵書わずかに3,000冊の領主個人文庫(ffürstliche Privatbibliothek)にすぎず、その場所も居宅に接して設けられ、ライプニッツもそこに住居を置いての勤務であって、しぜん差し当っての彼の司書的な活動範囲も、きわめてささやかなものであった。しかも彼が図書館長の職を与えられて3年目の1679年フリードリッヒはその生涯を閉じており、結局彼はその後嗣アウグスト(Ernst August, —1698)、ついで後に選挙侯となり、さらにジョージ一世としてイギリス国王に迎えられて(1714)、ハノーヴァー朝(1714—1901)の基を開いたルードウィッヒ(Georg Ludwig von Braunschweig-Lüneburg, 1660—1727)の3代に仕えることになったとはいえ、これら2人の後継者は、フリードリッヒとは全く異なり、図書館の問題についてはそれ程の関心をもたないままに、終には正常な運営にも事欠く実情となった許りではなく、派手好み<sup>105)</sup>のアウグストによって侯邸(“Leine-Schloß”)の改築が行なわれるに当って、文庫は全くその避難所を失い、しかも直接の管理責任者であるライプニッツの立ち合いもないままに、あちこちと移し替えられて、狭い場所に乱雑に放置される有様となった。ライプニッツが傷心と落胆の余り、このように狭量にしてがん迷(kleingeistige Engherzigkeit)な主君の許を離れ、他に職を求めんとしたのは、フリードリッヒが死去した翌1680年以降であるが、結局はライプニッツにとって第3番目、従って最後のものとなったウォルフエンビュッテル図書館(Wolfenbüttel Bibliothek)の運営に当ることになった。彼がハノーヴァーに招かれてから15年目の1691年のことであり、正確には1月4日付をもって、兄弟の共同摂政者(brüderlicher Mitregent)であったアウグストならびにウルリッヒ両公爵(Herzöge Rudolf August und Anton Ulrich von Braunschweig-Wolfenbüttel)名をもって辞令が交付されている。そしてライプニッツに委嘱されたのは、両家の歴史編さんと図書館の管理、それに枢密顧問官職の3つであったが、この図書館は、ユリウス(Julius von Braunschweig)が1568年蔵書の礎を築いたとも、あるいはまた、おそらくはそれに先立つ1558年、すなわち彼が父の家督を継承する10年前すでに創設したものであったとも伝えられている。これが“旧ウォルフ<sup>106)</sup>エンビュッテル図書館”で、孫の代に至ってヘルムステット大学(Universität Helmstedt)に譲渡

104) Edwards, Edward: *Memoirs of libraries; including a handbook [of library economy]*. Lond., Truebner, 1859. Vol. II, p. 426. Reprinted. N. Y., Burt Franklin, 1946. (*Burt Franklin Bibliography & Reference Series* 72)

105) Steudtner. K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser*...S. 215 (*Anmerkungen* 34)

106) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 66; Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. II, p. 421.

された後、アウグスト (*Herzog August von Braunschweig*; 上記共同摂政者の父) によって新しく、遥かに立派な図書館として、もとの場所に合併されて出来たのが、<sup>107)</sup> “新 ウォルフエンビュッテル図書館” であり、その歴史的由来に基づいて、今日でも “アウグスト公図書館” (*Herzog August Bibliothek zu Wolfenbüttel; Bibliotheca Augusta*) の名をもって呼ばれているものである。1635年彼は王位を継承したが、年間16,000ターラー (Thaler) に達する金額をそれに投じ、自らの手によって目録を作製し、このように彼が死去した時には、2,000冊の書写本を含めて総数約28,000冊、これがリプニッツの図書館長就任当時の蔵書であり、この図書館についてはアウグスト自らが、

われわれは、大いなる配慮と、それに多大の費用と労力とをもって、われわれの図書館を単にまとめて来ているのみならず、さまざまな、そして信ぜられないほどの多くの労苦をもって、これと同様のものは、全ヨーロッパ中においても、ほとんど見出し得ないようなすぐれた整理と配置を行なっている

とのべているほど、誇高い存在としていたものであった。<sup>108)</sup> リプニッツは結局この図書館と、晩年の正しく4分の1世紀 (1691—1716) を共に歩んで来たことになり、その間 ‘蔵書の著しい増強’ に果した彼の役割、その功績について言及されるのが常であるが、ヘッセルによってはさらに、その蔵書に対するアルファベット順目録 (alphabetischer Katalog) を作成したことと、新建築、すなわち ‘明りとり付きの円屋根をもった卵円形集中建築’ (ovaler Zentralbau mit Oberlichtkuppel) の構造を執る新しい図書館の完成が挙げられている。そしてさらに彼は言葉を続けて、しかしながら、リプニッツという人が、図書館史の上に、非常に卓越した地位を占める所以は、彼が成し遂げたこれらの諸業績 (Leistungen) の故ではなくて、実はゲルフ家、すなわちハノーヴァー宗家の領主たち (welfische Fürste) に書き送った書簡類、そして沢山の請願書 (Eingabe) 中に含まれている図書館運営上の原則 (Grundsätze)・理念 (Ideen)・計画 (Pläne) のためであることを書き添えている。<sup>109)</sup> すなわち彼が現実には図書館において成し得たところは、その抱いていた構想の上からいえば、きわめて微々たるものであったことに言及したものであり、こうした書簡類の整理と今後における公表を待って、彼の図書館思想の全容も始めて明らかにされるであろう。なお彼が作製した目録というのは、この図書館の創設者であるアウグストの当初の意図を続行する方針のもとで進められた “在庫目録” (Inventarium)<sup>110)</sup> に外ならないが、形態としては、マインツ時代に作り上げた既述のアルファベット順件名目録の体験を生かしての発展であり、この目録は実のところ、19世紀中に在っても、依然としてこのアウグスト公図書館における主要目録 (Hauptkatalog) としての役割を果たして来たものであった。特に彼がこの目録作成に当って加えた新たな考慮に、それをどのような体系的配列の下に置くかという問題 (systematische

107-108) *Ibid.*, S. 75.

109) *Ibid.*, S. 89.

110) Steudtner, K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 212.

Bestandsordnung) があり、この場合彼自身は、‘哲学者としては最高位’の人物であったにもかかわらず、従って、“思弁的・哲学的方法”(spekulativ—philosophische Methodik)こそいわば身近かなものであったにもかかわらずそれには拠らず、逆に“実用的・哲学的観点”(praktisch—philosophischer Standpunkt) からこの問題に取り組んでいる事実が指摘されている。実際には10個の主要群(Hauptgruppen)にまとめて行く方法をもってこの問題への解決が図られている訳であるが、ここで彼が特に“10”という数字を選んでいることに関してストイトナーは、‘われわれはここに、アメリカ人メルビル、デュイによる十進分類法の音音(Anklänge)を見い出す思いがする’<sup>111)</sup>と記している。

また図書館新建築の完成に関していえば、その構想自体は、明らかにリプニッツに出たものであり、すなわち彼は図書館長に就任して2年後の1693年両公爵に対して、“ウオルフエンビュッテル図書館建築に対する将来計画”(Perspektivplan zum Aufbau der Wolfenbüttel Bibliothek)を提出している。おそらくこれを最初のものとして、その後も再三にわたり進言が行なわれたものと思われ、ストイトナーによつては、1695年のものが紹介されている。<sup>112)</sup>既述のようにそれは、卵円形の集中建築、すなわち中央広間方式をとるものであり、12本の柱がそれを支え、天窓からは自然光線を採り、また高い灯火台を設けたものであったが、エトワーズによると、外部の平行四辺形は、長さ150、巾、110フィート、したがってその面積は約1650m<sup>2</sup>のものであり、<sup>113)</sup>一方その再建に当ってリプニッツ自身は、暖房・照明つきの別室を確保するため、非常な努力を払ったにもかかわらず、ついに実現せず、それが具体化したのは、それより100年以上もたつて1835年のことであったとして、リプニッツの場合、いずれにしても実現を見たものは、彼の抱いた構想のほんの一部にすぎず、その理想としたものの多くがつねに時代に先んじたものであったことを物語る一例としてこの事実<sup>114)</sup>に言及されている。

## 12

以上のように、ノーデの“意見書”が、英・独両国の図書館思想に影響を与えたものとして、特にその名が挙げられるイーヴリンとリプニッツの2人について、前者は直接図書館との関係をもたない人でありながら、彼の英訳書が公刊された1661年が、まさにイギリスにとっては、新たな図書館の発展に向うその初頭の時期に該当していたことによって、逆に後者は、70年の生涯中、社会人としては、そのほとんどを占める通算45年間を図書館と共に歩んで来たその実践を通じて、すなわち実質的には全く異なるものによってそれが行なわれている点を指摘することが

111) *Ibid.*, S. 213.

112) Leibniz, Perspektivplan vom 4.6.1695 an die Herzöge Rudolf August und Anton Ulrich zu Braunschweig-Wolfenbüttel (Steudtner, K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 216, *Anmerkungen* 39).

113) Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. II, p. 680-681.

114) Irwin, R.: *The English library...*, p. 154.

できるであろう。そしてイギリスの場合について言えば、すでに触れたように、イーヴリンの訳書による影響は比較的後年の事に属し、ドイツの場合に在っても、ライプニッツに先立ってすでにその影響を受けた人々があり、むしろ彼はそうしたものを通じて、ノーデの思想に触れる機会に恵まれたとも言えるであろう。

アーウィン教授により、イギリスにおいて、“ライブラリー・エコノミー”に関する最初の著述を残した人とされているのは、穏和派の新教牧師であり、同時にまたチャールズ一世（Charles 1, 1600—’49; 1625—’49在位）死去の翌年（1650）から“王政復古”（1660）に至る間、王室文庫長代理（Deputy Keeper of the Royal Library）の地位にあったデュリー（John Dury or Durie, 1596—1680）であるが<sup>115)</sup>、その抱いていた図書館思想についても、‘おそらくそれはノーデの著作に基づいているものであろう’<sup>116)</sup>とされ、さらに彼とライプニッツとの関係についても、‘ライプニッツはその多くのものをノーデの著作に、同時にあるものはまたジョン・デュリーならびにリチャード・ベントリー（Richard Bentley, 1662—1742）に負うていた’<sup>117)</sup>と記している。この言葉はヘッセルが、‘ライプニッツの考え方の多くはすでにノーデの“意見書”の中に、そのほかデュリーやベントリーにおいても見られる’<sup>118)</sup>と述べているところと照応するが、このデュリーはまたプレディーク（Albert predeek, 1883—）によって、‘イギリスにおける最初の図書館理論家（library theorist）と称すべき人物’<sup>119)</sup>とされ、同時にド・ビューリ（Richard de Bury, 1287—1345）、ギルバート（Sir Humphrey Gilbert, 1539?—1583）、ディー（John Dee, 1527—1608）以来、図書館行政の問題に関してその見解を表明して来たどの人物よりも、はるかに進んだ思想の持主であったことが指摘されている<sup>120)</sup>。しかもその思想というのは、“国立図書館”（national library）の構想であり、かつそれを‘寛大にして学問的なもの’にして行くという考え方であり、具体的には、彼自身が館長の地位に在った王室文庫を発展させて、それを‘学問の公共的在庫たらしめ、さらに増強し、そしてすべての人に最も役立つ方法で提示する’<sup>121)</sup>ことであった。彼がノーデの思想的影響のもとにあるとみなされるのは、この究極的なものの考え方の一致点である。このようにしてノーデにおけるイギリスへの思想的影響という問題は、何よりもまずこのデュリーとの関係において把握されなければならないであろうし、しかもデュリーはノーデより4年の年長であって、かつ27年後に世を去った関係上、彼の生涯の中には、ノーデのそれがそのまま包摂される点からいっても、この2人は全く同じ時代を共に歩んだといえるであろう。そして図書館思想の系譜の面からこれをながめると、ノーデの思想はいち早くこのデュリーに伝えられてイギリスにおける思想的発展につちかい、他方においてはすでにノーデの思想的影響の下にあっ

115) *Ibid.*, p. 168.

116) *Ibid.*, p. 169.

117) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 90.

118) Predeek, A.: *op. cit.*, p. 22.

119) Irwin, R.: *The English library...*, p. 210.

120-121) *Ibid.*, p. 168.

たライプニッツに対して、イギリスにおいて展開されて来たものの影響、また逆にイギリスに対するライプニッツの影響という形での相互関係、すなわちヨーロッパにおけるこれら3つの主要国を中心とする近代的な図書館思想の交流期を経て、その歴史は、18世紀の終りフランス革命（1789—'99）を介在しての、特にドイツを中心とする図書館学思想の形成期という新たな段階を迎えることになった。17世紀という時代はこうにしてノーデの思想をその起点として展開されたものをもつてその主流としており、18世紀はいわばその延長であるが、しかしながら図書館それ自体は、その間に台頭して来た絶対主義（absolutism）と結びついた象徴的存在として、その姿を現わして来た時代でもあった。そしてそれらの中に、後には国立図書館への発展を遂げたものがあつたことについてスタインバーグ（Sigfrid Henry Steinberg, 1899—）は、

大きな国立図書館の大多数は、17・18世紀中に創立されたが、それらは実のところ、絶対主義者君主国（absolutist monarchy）の、知的分野における中央集権的傾向の象徴であつた<sup>122)</sup>

とのべて、ベルリンのプロシヤ国立図書館（1659）、コペンハーゲン（デンマーク）の国立図書館（1661）、スコットランドの国立図書館（1682）、マドリッド（スペイン）の国立図書館（1712）、フィレンツェ（イタリア）の国立中央図書館（1747）、そして大英博物館（1759）などの名を挙げて、それらの創設には、それぞれに自国における最高の国家的関心に役立てようとした創設者たちの野心を正当化して来たもののあつたことを指摘している。このような歴史的事情はようやくその基礎を固めつつあつたフランス絶対主義の中に在ってノーデが、図書館と公衆、図書館と未来との結びつきをもって思想上の基本線としたその方向とも異なるものであつたし、また彼の思想を継承したデュリーなどのいう国立図書館は、言葉としては同じものであつても、既述のようにそれは“学問の公共的在庫”（public stock of learning）を国家的に保障する意味で用いられており、しぜんその実質においては相違するものであつた。まさしくマソンのように、ノーデがその“意見書”の中で開陳している基本原則が歴史的具象を獲ちとるためには、おな‘2世紀ないし3世紀’の期間を必要としたといえるであろう。それ故にそのもつ現代的意義はきわめて大きく、何よりもここでは、それが19世紀の初頭図書館学思想の形成につちかつて行く上に必要な発生基盤の構築、それへの先導的な役割を果した点が重視されねばならないであろう。

### 13

イギリスにおいて、ノーデの思想をいち早く受けとめ、この国において“ライブラリー・エコノミー”に関する最初の文献を後世に残した人として、その歴史的意義を高く評価されている既述のデュリーは、すでに触れたように1650年から60年に至る間、王室文庫長の地位に在った人として記録され勝であるが、名目的とは言えその地位は国じ尚書ホワイトロック（Bulstrode White-locke）のものであり、正確に言えば彼はその代理役（deputy keeper）であつた。またその在任期間

122) Steinberg, S. H.: *op. cit.*, p. 181.

123) Masson, A. et Salvan, P.: *op. cit.*, p. 26.

も形式的には約10年間にわたってはいるもの<sup>124)</sup>、終始彼は温和派の新教牧師(清教徒)として特にルーテル派(Lutherans)とカルヴィン派教会(Reformed Churches)との和解工作・新教諸派の合同運動に献身し、ためにそのほとんどをヨーロッパ大陸での巡歴にすごし、したがって実質的に彼が図書館の業務に携った期間は、1650年の10月から、1652年の3月に至るわずか1年5ヵ月にすぎず、結局はドイツにおいてその生涯を閉じている。また王室文庫とはいっても、ヘッセルの<sup>125)</sup>ように王の私的収集品の置かれていた場所(königliche Privatsammlung)<sup>126)</sup>であり、単に書物のみならず、その中にはメダル類をも含めたきわめて小規模のもの(King's medals and library)<sup>127)</sup>であった。

このデュリーによって書かれ、上述のごとき評価が加えられている文献は、1650年ロンドンにおいて公刊された全文3,000語程度のきわめて小冊のものであり、著述というよりは、実際には、彼がその友人ハートリヴ(Samuel Hartlib; ポーランドの学者・教育唱道者、1628年イングランドに定住)に対し、図書館員(librarian-keeper)の地位と役割についての所見を書き送った第一(1,700語)・第二書簡(1,200語)の2つを合わせ、それにハートリヴ自身が序文を付して刊行した“新図書館員”(The reformed librarian-keeper)と題するものである。そして第二書簡の方は、第一のそれにおいて開陳した要点を、いわば、もっと花やかな文章のもとでとりまとめたもの、内容的にはその反覆という体裁をとっている。彼はこの書簡(第一)の中で、

私の考えるところ、図書館員業務の目的とするところは、学問の公共的在庫、すなわち図書および写本の類を保管し、その増強を図り、それらをすべての人々に、最も役に立つ方法で提供することである。その意味において図書館員の仕事は、学問を助ける問屋(factor)・交易者(trader)であると共に、保管の任に当る出納責任者(treasurer)でもあり、またそれを供与し、立派に利用されるのを見届け、少くとも悪用されることがないように見守る調剤者(dis-penser)<sup>128)</sup>でもある

とのべている。ソーントン(John L. Thornton)によると、デュリーは結局、ライブラリアンシップが、今や独立した専門職(independent profession)と認められるにふさわしいものになりつつあるという前提のもとで、過去のように図書館員はもはや単なる書物の管理人(custodian)でも配給人(distributor)でもなく、いわば“文化の宣教師”(missionary of culture)たるべきことをここで説いた<sup>129)</sup>と記しているが、そうした図書館員とその業務、ついで目録とその配列、配架図書と印刷目録の

124) 1649年にホワイトロックが文庫長に任命され、その翌年デュリーが代理役を命ぜられた(Thornton, J. L.: John Durie; 1596-1680. *Selected readings in the history of librarianship*... chap. 7)

125) Irwin, R.: The heritage of English library, ... p. 240.

126) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 81.

127) Irwin, R.: The English library..., p. 168.

128) Dury, John: The reformed librarian-keeper, or two copies of letters concerning the place and office of a librarian-keeper. *Literature of Libraries*..., [II], p. 41-71.

129) Thornton, J. L.: John Durie (1596-1680). *Selected readings in the history of librarianship*, 1966. Chap. 7 (p. 51-56).

関連、蔵書の拡大と利用方法の改善といった順序でこの書簡は綴られている。そしてヘッセルは、同時にその中から、“近代公共図書館志向の先取り”(Vorausnahme der modernen Public-Library-Bestrebungen)を思わしめる歴史的視点の展開を汲み取っており、<sup>130)</sup>アーウィン<sup>131)</sup>はまた、デュリーがその実質的な管理を命ぜられた王室文庫をして、真に国家的な集書へと発展させて行かねばならないと考えたその思想を重視して、ノーデにおけるマザラン文庫の公開、既述のごとき基本的な図書館観との関係において、ともにノーデ、デュリー両者間に存する思想的軌一性に触れている。<sup>131)</sup>

すでに言及したごとく、デュリーと図書館との実質的な関係はきわめて短い期間のものであり、したがってそれは、84年にわたった彼の生涯の上から見ると、‘ほんの通りすがりの垣間見’程度のものにすぎなかったともいえるであろう。<sup>132)</sup>しかもこの書簡の公刊は1650年彼が王室文庫長の代理役に任命された直後のことであって、しぜん実地的な体験を重ねる暇もない間の執筆であり、おそらくは王室文庫を実質上預る立場に置かれたその機会に、図書館というものについて純粋な思索をめぐらした結果を、率直に友人に書き送ったものであろう。事実彼自身、第二書簡の冒頭において、‘ふと思いついたいろいろな考え’<sup>133)</sup>という表現を執っている程である。

このデュリーとベントリーとの思想的関連については、ヘッセルによって、王室文庫をもって公開・公共のもの(öffentlich)に仕上げて行くというその考え方における一致点として捉えられている。<sup>134)</sup>このベントリーが王室文庫長に就任したのは1694年の4月、またその地位を息子(Richard Bentley, the younger)に譲った正確な日付は明らかでないが、おそらくは1735年のことであつたと推定されており、<sup>135)</sup>従ってその在任期間は41年の長期に及んでいる。もちろん直接の実務は、代理職(deputy keeper)であるキャスリー(David Casley)に委任された形ではあったが、エドワーズによってこのベントリーは、‘彼以前に同文庫の長に就任した人の中では最も著名な人物’<sup>136)</sup>とされており、同時にイギリスにおける文学および学識という面においては、1つ時期を画する偉大な存在であつたことが伝えられている。すなわち彼は古典学者として特に著名であり、イギリスにおける古典学の向上と発展に尽した功績は非常に大きく、また長年にわたり(1700—’42)、トリニティ・カレッジ(Trinity College, Cambridge)の学長でもあつた。

ベントリーが文庫長の地位にあつた期間は、イギリス王家でいえば、ステュアート(Stuarts)とハノーヴァー(Hanover)の両家にまたがり、ウィリアム三世(1689—1702在位)からジョージ二世(1727—’60在位)に至る4代に及んでいる。そして彼がその文庫長に就任すると共に着手した仕事の中で、著作権特典(copyright privilege)の強制による文庫の強化策と、それによ

130) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 81.

131) Irwin, R.: *The English library*..., p. 168.

132) Irwin, R.: *The heritage of English library*..., p. 240.

133) Dury, J.: *The reformed librerie-keeper...Literature of Libraries*..., [II], p. 59.

134) 注 130 に同じ。

135) Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. I, p. 425.

136) *Ibid.*, p. 421.

てとりあえず1,000冊の蔵書増加を果たした事績は特に著名であるが、<sup>137)</sup> 当時はセント・ゼイムズ宮殿 (St. James Palace) 内に置かれていた王室文庫が、スペース・便宜・美観その他の面において著しく不十分である点を指摘して、セント・ゼイムズ公園 (St. James Park) の南隅に新館の建設を強く主張した人でもあった。彼は‘長期にわたった戦争、そのために費した支出と労苦、その故に新館の建設という問題が人々の関心事とはなっていないとすることは、まことに微々たる弁明にすぎない’として、その計画推進の先導的な役割を担ったにもかかわらず、ついに実現を見るに至らず、結局この王室文庫は、大英博物館の他の集書と合体されることになった。それは1753年の法律によって同館が設立され、いよいよロンドン郊外のモンタギュー・ハウス (Montagu House) <sup>138)</sup> において開館の運び (1月15日) となった 1759年のことである。

ベントリーの図書館思想は、しぜんこうした新館建設運動の中において展開されており、直接には彼が文庫長に就任後3年目の1697年に発表した“王室文庫新築提案”<sup>139)</sup> がそれであり、一面においては同文庫の改革案であったとともに、他面においては、全く新たな図書館の建設構想でもあって、ほんの片面刷りのもの (broadside) ながら、内容を12の項目に分けて、王室文庫はそれを拡大・充実した上、国民のすべてが利用できるような、本当の意味での国立図書館へと発展を遂げるべきである事を強調したものである。そして新図書館は蔵書20万冊の収容能力を備え、しかし単に図書のための機関に止めず、学会の会合、個人ならびに共同研究に対しても便宜な施設としての機能を兼ね、その経費は法律によって確保され、財源としては外国紙に対して課する輸入税を充当することなどをその骨子としたものである。特にこの印刷物においてベントリーが、王室図書館は‘公共利用のために計画されかつ建設’されるべき点を強調していることについてアーウィンは、当時としてはまことに賞讃すべき理論 (laudable theory) <sup>140)</sup> であったとのべているが、エドワーズはまた、この新しくつくらるべき図書館に対して“free library”という呼称が付与され、あらゆる外国人にもここで研究上の便宜が与えられることになれば、イギリスの栄光は、それによっていよいよ推進されることを、ベントリーがここで力説している点に言及している。<sup>141)</sup> 要するにデュリー、ベントリーの2人は、ともに王室文庫というきわめて制約的な図書館に関係しながらも、結局は国立・公共・公開図書館へ向っての、顕著な思想的礎石を歴史に留めている人物である。

137) イギリスの法律 (Parliament Enactment) によって印刷業者に対し、王室文庫長 (Keeper of His Majesty's Library) ならびにオックスフォード、ケンブリッジ両大学の副学長 (vice-chancellors) に対し、出版図書の各1部を提出することを義務づけた最初は、1662年、すなわちチャールズ二世 (1660-85在位) 時代であり、期限つきのものではあったが、その後延長・強化の策が採られて継続していた (Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. 1, p. 422).

138) *An act for the purchase of the Museum or Collection of Sir Hans Sloane, and of the Harleian Collection of Manuscripts, and for providing on General Repository for the better reception and more convenient use of the collections and of the Cottonian Library and of the addition thereto* —The Act, 26 Geo. II, c.22, 1753.

139) *Proposal for Building a Royal Library and Establishing it by Act of Parliament.* (Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. 1, p. 423-426)

140) Irwin, R.: *The heritage of English library*..., p. 241-242.

141) Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. 1, p. 426.

ノーデの思想を、その著“意見書”の英訳によってイギリスを初めとする英語諸国に普及したイーヴリンは、図書館との直接的な関係を全くもたない人であったし、その思想的影響を受けたデュリーならびにベントリーの2人は、ともに王室文庫管理の直接当事者であったとはいえ、前者が実質的にそれに干与した期間は1年半にも満たず、その生涯の主体をなしているのは、温和派の清教徒としての宗教活動であり、主要な関心もしぜん神学と宗教教育であった。また後者の場合も、形式的には文庫長としての地位を41年にわたって保有していたとは言え、彼は偉大な古典学者であり、その41年中の35年間は実はトリニティ・カレッジの学長という重職に在った。これに対してライプニッツは、偉大な哲学者・数学者・自然科学者・法学者・神学者・言語学者・歴史家、すなわち“万能の人”<sup>142)</sup>(Universalgenie)として活躍し、“精神的英雄”として仰がれる人であるが、既述のようにその生涯は45年にわたって、3つの図書館とその行を共にし、図書館について数多く発言し、目録の編さんに従い、分類表を作製し、新館の建設を推進するなど、その図書館人としての実質的な事績において上述の人々とはその事情を異にしている。むしろそうした点においてはノーデときわめて近似した関係をもつ人物であったということができよう。すなわちノーデは医学を修めて医業に従わず、あらゆる領域にまたがり、100種を数える著述を残しながらも、数個の図書館に干与し、結局は図書館人としてその生涯を閉じ、偉大な事績を今日に伝えているからである。しかもこの2人は、17世紀の前・後半期を平等に分ち合う形で生存し、しかも両者間における思想的な影響が明らかであり、さらにはまた18世紀に対するそれら思想の支配的関係、さらには19世紀に入って、ノーデがあらためて思想的開祖としての姿において回想されて来る事情を合せ考えると、ノーデからライプニッツにまたがる期間に展開されて来た思想こそ、19世紀に現われて来る図書館学思想の発生基盤を構築するものであったとみなすことができるであろう。

もちろんライプニッツは、ノーデが死去した1653年においてはまだ幼少(7歳)であり、したがって両者の間に直接の関係がある訳ではないが、ヘッセルによつては、ライプニッツの図書館観に対して決定的な影響を与えたものとして、彼がマインツ選挙侯の政治使節として派遣され、パリに滞在(1673—'76)していた事実に言及<sup>143)</sup>されている。理由としては、当時のフランスは、事実上の宰相であったコルベール(Jean Baptiste Colbert, 1619—'83)のもとで、あたかもフランス絶対主義の象徴的存在であるかのごとくに、王室文庫(*Bibliothèque du Roi*)が非常な勢いで充実発展を遂げつつあった時期に際会していたからである。そして‘クレマンおよびバリュエズが彼の友人であったし、またノーデの“意見書”が彼の読書(Lektüre)中に加っていた’とのべている。クレマン(Claude Clément or Claudius Clémens, ca.1594-1642)は耶蘇会士であるとともにこの王室文

142) Steudtner, K.: *op. cit.* *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 211.

143) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 88-89.

庫の司書であり、特に167(3?)5年以来蔵書の再整理を担当し、結局これを23主類に分ける方法をもって分類目録を完成したその功績を特記されている人物である。<sup>144)</sup>しかも彼が採択したこの分類法は、単に王室文庫の基本となった許りではなく、これがのちフランスにおいて伝統的に採用されて行った5門分類 (Fünfteilung), すなわち“フランス方式” (French System) の起原につちかった意味において、またその方式が国際的な影響を与えた点において分類史上重要な位置を占めるものである。セイヤーズによると、その創始者が誰であったにせよ、それが“理想的形態” (apotheosis) に到達したのは、ブリュネ (Jacques-Charles Brunet, 1780—1867) によって、その労作“本屋ならびに愛書家のための提要” (*Manuel du Libraire et d'Amateur de Livres, Paris* 1810), すなわち各時代・各専門にわたるフランス語による稀こう書を収録して価格を付した目録において採択・展開されて行った時であったという。<sup>145)</sup>しかしながらエドワーズによれば、このクレマンの分類法も実は、ノーデのそれをモデルにしたものであったとされ、ノーデ、クレマン、<sup>146)</sup>ライプニッツ3者の間にその関連がたどられている。

またバリューズは (Elienne Baluze, 1630—1718) は、歴史家、特に教会史の史料集成に果たした功績によって著名であり、コレジュ・ロアリアル (Collège Royal) の教授 (1688)・同校長 (1707—'10) 一となった人であるが、1667年この王室文庫の司書となり、きわめて強硬・積極的な方策のもとに文庫の強化・充実を図り、ついにそれをフランス革命時代に在っては世界最大の図書館に築き上げた初期の功労者として位置づけられている。<sup>147)</sup>ヘッセルが宰相コルベールに対する彼のそうした関係について、‘マザランに対するノーデのそれと全く同一であった’<sup>148)</sup>と記しているように、あたかも第二のノーデともいふべきこのバリューズによって、ルイ十四世の王室文庫に対する積極的な図書収集が行なわれていたのが当時の実情であり、ライプニッツのパリ滞在、そしてこの2人の人物を友人として持つに至ったこと、それらを通じてノーデとの思想的関連の契機は十分に整えられているとみるべきであろう。なおその滞仏中における愛読書の中にノーデの“意見書”が挙げられていることに関しても、この書物についてライプニッツはこの時始めてそれに接したことを必ずしも意味するものではなく、むしろそれとの出会いは、さらに数年の以前にさかのぼって在ったとみなすべきであろう。<sup>149)</sup>すなわちグーラウエルが指摘しているように、ライプニッツが始めて図書館員としての第一步を印したボイネブルグ図書館の所有者クリスチャン (ボイネブルグ男爵) の“愛読書” (Lieblingsschrift) となっていたのが実はこの“意見書”であり、当時彼が最も大きな関心事としていた文庫の整備と図書の整理に対してノーデのこの書が

144) *Ibid.*, S. 79-80.

145) Sayers, W. C. B.: *op. cit.*, p. 86.

146) Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. II, p. 771.

147) この王室文庫は、コルベールの政治的支配の始った1661年当初にあっては、書写本・刊本合して1万6,746冊にすぎなかったが、22年後の1683年、すなわち彼が死去した年には、書写本1万2,000冊、刊本4万冊を数えた (Edwards, E.: *op. cit.*, Vol. II, p. 248)

148) Hessel, A.: *op. cit.*, S. 78.

149) Guhrauer, G. E.: *op. cit.*, *Serapeum* 12(1851), S. 2.

大きな指針となっていたことがうかがわれるからである。おそらくはライプニッツが思想的に強い影響を受けた“意見書”との契機は、このクリスチャンを仲介として与えられたものであろう。

ウィンガー (Howard Woodrow Winger, 1914—) によると、ライプニッツが図書館を運営して行ったその仕方は、ノーデによって示された“フランスの手本” (French example) に従ったものであったが、しかし収書の面からいえば、ノーデとは異って、より多くの重要性をむしろ新刊書の獲得に置いた点の相違を指摘している。<sup>150)</sup> しかしながら普遍的秩序の世界観に立つライプニッツの思想ならびに蔵書構成論は、そのままノーデの“普遍的図書館”論に連るものであるが、ストイトナーによると、彼における多くの図書館についての発言も、せんじ詰めて行けば、それはつねに将来というものをはらんだ形の思考 (zukunftssträchtige Idee) をその基にしており、かつその図書館は公共のものであり、したがってまた法的根拠をもつ機関 (öffentlich-rechtliches Institut) <sup>151)</sup> として、国家によって維持されるものであったという。いずれにせよその多くの点において基本的には、ノーデ、デュリー、ベントリーなどの思想と一致するが、しかしながら近代的な公共図書館、すなわち‘市民が利用する図書館’ (bürgerliche Gebrauchsbibliothek) の先導者 (Schrittmacher) としての位置づけにおいては、ライプニッツをもって至近の人物とみなすべきであろう。

15

ノーデをもって図書館学の開祖として位置づけたツォラーによって、ド・ベリ (ビュリ) (Richard de Bury, surnamed, 1287—1345. Richard Aungervill) が、その死去3ヵ月前の1345年1月24日、最後の筆を置いた<sup>152)</sup> “愛書” (*Philobiblon, seu de amore librorum et institutione bibliothecarum tractatus*), すなわち ‘非常にすぐれた書物愛, そして図書館に対するきわめて深い理解’ とをもって執筆した書物によって、‘ライブラリー・エコノミーの最初の基礎づけ’ (erste Begründung der Bibliothekonomie) <sup>153)</sup> が行われたとみなされている。ツォラーはもちろんのこと、19世紀の前半期、図書館学思想の形成につちかった人々にとって、ノーデへの回想は、さらにその源をなすこのド・ベリへと、その思想的系譜を必然的にたどらざるを得ない結果になったことを物語るものである。

ド・ベリ自身は、オックスフォードに学んだ (1302—’12) あと、ウインザーのエドワード (Edward of Windsor), すなわちのちのエドワード三世 (Edward III, 1327—’77 在位) の家庭

150) Winger, Howard: Aspect of librarianship; a trace work of history. *Seven questions about the profession of librarianship*, ed. by Philip H. Ennis & Howard W. Winger, p. 28. Chic., Univ. of Chic. Press, 1962 (Univ. of Chic. Studies in Library Science).

151) Steudtner. K.: *op. cit.*, *Über Bücher, Bibliotheken und Leser...*, S. 213.

152) Thornton, J. L.: Richard De Bury (1287—1345). *Selected readings in the history of librarianship*, 1966, chap. 3 (p. 20—24).

153) Zoller, E.: *op. cit.*, *Serapeum* 11(1850), S. 126—127.

教師、ついでその王位就任と共に重用されて、教皇庁使節(1330—'33)・王じ尚書・ダラム主教(Bishop of Durham)・大法官職(chancellorship of England)などの頭職を経た人であるが、要するに‘政治家にして学究’であり、およそ1,500冊に及ぶ書物を収集していたと推定されており、イギリスの歴史の上においては、学者あるいは行政家にして、彼ほど明確に、人間の教育的生涯の中に占める図書館の重要性を認識していた人はなく、また誰一人として彼が構想していたような図書館の設立計画に全力を傾けた人も無かった<sup>154)</sup>という。それは彼が当時における教育の在り方について深い省察を加え、その欠陥に想到し、‘教育のツールとしての書物の永続的な価値’を確信していたためであり、また死後は挙げてその蔵書を公共の利用に提供することを前提としてのそれは収集であり、その点ではイタリー・ルネッサンスの主唱者ペトラルカ(Francesco Petrarca, 1304—'74)と全く共通の基盤に立つ人であるが、このペトラルカとの出会いについても、おそらくそれは、1330年彼がアビニョン(Avignon; 1309—'77 教皇の都であった)に使節として赴いた時であったと想察されている。

ド・ペリの“愛書”は、別の観点からいえば‘結局は公衆の利用に供するために、書物の収集に捧げた自らの生涯についての弁明と弁護’でもあったであろうが、しかしながらこの著述を為さしめたものとしてアーウィン<sup>151)</sup>は、1つには14世紀の前半におけるイギリスの修道院ならびに大学生活について、書物の面からする論評、つぎには、書物のもつ真実の価値についての確信の2つを挙げ、それはとりも直さずスコラティズム(scholasticism)の破産を容認し、書物の教育に対する不朽の価値を宣言したことをも意味するとのべている。本文20章をもって構成されているこの著述が、図書館の、特に実際に言及しているところは、単にその一部にすぎないが、上述の観点から、図書館それ自体の在り方に対して省察を加えた、それ故に、歴史上始めて、“ライブラリー・エコノミー”に対する基盤設定の役割を、中世の終り近世のあけぼのに際して担うものとなったことの意義は非常に大きなものといわねばならないであろう。

151) Irwin, R.: The heritage of English library..., p. 181-196 (Richard de Bury).